

『科学革命の瞬間』

佐藤皇太郎

目次

第一部 実験物理大学

第二部 物理学部の人々

◎竹原誠（社会学科・准教授）

◎梅田秀樹（物理学部長・教授）

◎松本雅彦（生物学科・教授）と森健太郎（生物学科・特別研究員）

第三部 科学社会学実験

第四部 考察

◎数日後（松本教授との対話）

◎数ヶ月後（竹原准教授との対話）

◎十数年後（青池素子との対話）

たった一つの実験事実が世界をひっくり返すこともある。

第一部 実験物理大学

東京の大学がキャンパスを都心から郊外へ移すのは珍しいことではないが、この大学全入時代に、理科系の私立大学が郊外とはいえ東京都内に《新設》されたと報道されたときにはいささか驚き、いつか取材に訪れたいと思っていた。

僕は森健太郎というサイエンスライターだ。サイエンスライターの仕事は科学や技術を一般人向けに分かりやすく紹介する記事を書くことだが、最近と同業者も増えてきて差別化が求められている。僕の場合は、文字通りの《体当たり取材》を得意とする《お笑い系サイエンスライター》ということで通っているらしい。もともと自分で希望したわけではないが、そのようなポジションから記事を発信すると仕事になるのだ。インターネット上の大手技術系ニュースサイトの一コーナーである『モリケン』の当たって砕ける！』を毎週更新するために、全国の（と言いたいたいところだが予算不足のため実際には関東圏を中心に）大学や研究所をめぐり、実験台兼記

者兼カメラマンを一人でこなしている。フリーランスなので他社の仕事も受けてはいるが、絶対的な収入が少ない上に、いつ切られるか分からない不安もあり、年齢は三十五歳なのだが独身のままだ。

東京郊外の小さな駅からバスに揺られること約三十分。東京らしからぬ田舎の風景に目が慣れてきた頃、ようやく「実験物理学入口」という停留所に到着した。青空の下、バスを降りると懐かしい草の匂いにつつまれた。周囲は人家が点在しているだけで町としては寂れていた。道路沿いの木も草も伸び放題できちんと管理されていないように見える。新緑の季節なので風は心地よい。

停留所に付設された粗末な木製のベンチから白衣姿の背の高い男がニョキッと立ち上がり、僕の目を見ながら言った。

「森……だよな」

「桜井……か。久しぶり。わざわざ迎えに来てくれたのか」

大学院時代の友人、桜井京一である。実験物理学を訪問するにあたり、教員であるこの旧友に仲介を依頼していたのだが、ネット上のやりとりだ

けだったので顔を合わせるのは実に十年ぶりである。

「森は方向音痴だからな。しかもこの辺は道に迷うと熊が出る」

「まさか」

僕は修士課程だけで大学院を《退院》してしまっただが、彼は博士課程に残りそのまま研究者としての道を歩み続け、現在は実験物理学で専任講師をしているのだ。

「それにしても桜井は変わってないなあ。あの頃のままだ」

「おまえはずいぶん白髪が増えたみたいだが、苦労してるのか」

と言って笑う。昔のままの無邪気な笑顔にホツとする。細長い顔からシンボルマークの大きな銀縁眼鏡がはみ出している。

「桜井は世渡りが上手くなったよ。いつの間にか大学の先生か」

「まあな。でも俺のような若造は任期制だから安定した身分じゃないけど……」

大学はバス停から歩いて十分くらいだと言う。道すがら桜井が実験物理学について話してくれた内容をまとめると以下のようになる。

インターネットの発達により旧来の大学の存在意義が問われるようになって久しい。国内外を問わず学術論文などの専門的な情報を誰でも無料で近い負担で手に入れることができるようになったため、学ぶ意欲のある若者は自宅（インターネット）と公的な図書館（さすがにまだリアルな書籍も必要だ！）を往復するだけの生活で安価に大学レベルの知識を身につけることが可能になった。では、インターネット経由で学べないもの、もしくは学習効率が著しく低下してしまうジャンルは何だろうか。それは《実技》やそれに付随する《演習》である。美術や音楽といった芸術系だけではなく、外国語や理科系の実験・試作も《実技》であるという。

実験物理学は、とかく数学的基盤が重視されがちな現代物理学研究の風潮のなか、物理学の原点に戻り、実験を主体にこの世界の神秘と宇宙の真の姿に迫ろうとしている。校是は「とにかく実験だ」である。物理学部だけの単科大学で、学科構成は数理情報学科・物理学科・化学科・生物学科・社会学科の五学科。物理学部なのに社会学科を擁している点が目を引くが、上述の五学科の順に宇宙を構成している物理的要素の階層をミクロ

からマクロに並べているのだという。ピタゴラスよろしく万物の根源に数や情報を据えているのは一種の賭けだと思いが、それより上の階層では、たしかに素粒子が原子を作り、それらが集まって分子を作り、筋肉組織や消化器官を作り、生物個体を作り、社会システムを作っているのは事実だ。これらの各階層を《実験物理学》という視点で一貫して捉え直すことには意義がある。なお特に基礎科学・応用科学といった区別はなく、あまり縄張りを意識せずに、時には学科の枠を越えて幅広い研究が行われているということだ。

すっかり緑が鮮やかになった桜並木の通りを抜けると、少し視界が開けた。桜井が言った。

「さあ、着いた。ここが実験物理大学だ」

僕らの目の前には、木造二階建ての古い小学校の校舎と広い校庭があった。僕の質問を遮るように桜井が続ける。

「廃校になった小学校を利用しているんだ。さすがに内部はリフォームされているけれど、外装はそのまま利用しているらしい。だって……美しい

だろ」

なるほど、こういう手もアリなのか。教師と学生が集える場所さえあれば良い。学校の原点を見る思いがした。

「まだ松本先生との待ち合わせ時間には少し早いから、俺の研究室でも見ていってくれよ」

そうそう、本日の訪問の第一の目的は生物学科の松本雅彦教授に変性意識状態（通常とは異なる意識の状態）を人工的に作り出す装置を体験取材させてもらうことであつた。気難しいことで有名な松本教授だが、桜井に仲介してもらつたので段取りがスムーズに進んだことを感謝した。

玄関でスリッパに履き替えて、まずは物理学科の桜井の研究室へと向かう。桜井は現在、物理教育法について研究しているのだ。高校物理で、光が波の性質を持つことをレーザー光と二重スリットを使った実験（ヤングの実験）で示すのは一般に良く行われている。これは、横に並んだ二つのスリットを通った光はあたかもそれら二点から水の波が広がるように、ある部分は強め合い、またある部分は弱め合つて、投影先であるスクリーン

上に縞模様を作るといふものだ。それとは別に、電子部品を内蔵した小さなブロックを組み合わせることで電子回路を試作できる《電子ブロック》という学習教材が知られている。これは、ブロックの配置を変えるだけでラジオになったり風呂の水位計になったりコンピュータの基本素子である論理回路になったりするものだ。桜井は光の実験ができる電子ブロックに相当する新しい学習教材《光ブロック》を構想し開発している。最終的には光子や電子の持つ粒子性と波動性を高校の理科室レベルで再現・検証できる《量子ブロック》を目指したいという。

小学校の教室は大人の目から見ると意外と狭いが、一人の研究者が研究室として使うには十分な広さだ。部屋の半分がゼミや少人数の授業のためのミーティングスペース、残りの半分に執務机と書棚と実験設備がある。大きなテーブルの上には試作段階の多数の光ブロックが雑然と置かれていた。「教育用と言ったって馬鹿にできないんだぜ。最近、この光ブロックの組み合わせ次第で、光が持つ波動性と粒子性の矛盾を突きつける実験も可能なことが分かってきた」

「公に発表できる段階になったら、真っ先に取材させてもらおうよ」と伝え、壁の時計を指さした。桜井はまだ話し足りないようだったが、テキパキと身支度をして「生物学科は二階なんだ」と言いながら、先程とは別の扉を開けて出て行った。先を歩く桜井の背中を見ながら、「教師ですらどういう結果が出るか分からない実験装置を作りたいんだ」という彼の言葉を反芻していた。

「君がモリケン氏か。待ってたよ。がっはっは……」

松本教授はやや大柄で良く笑う人だった。五十歳前後のはずだが、十歳以上は若く見える。「講義が終わってから」と、この時間を指定されたのだが、派手な柄のTシャツに穴の開いたGパン姿。髪はボサボサだし、サンダルもボロボロ。さつきまでこの格好で授業をしていたのだろうか。

ひと通りの挨拶が終わると、「それじゃ、俺は授業があるので」と桜井が席を外した。僕は松本教授の後について研究室内のミーティングスペースへ移動し、腰を下ろした。

「お忙しいところ本当にありがとうございます。早速ですが、インタビューを始めさせていただけます」

「あ、ここじゃ、そういう堅苦しいのは無しね。私のことも『松ちゃん』で良いから。学生もそう呼んでるし……」

とテーブルの上にある木製の大皿から駄菓子をひとつ取り、私にも勧めた。この人、本当に松本教授なのか。

「な、なんか、めっちゃくちやフランクですね。失礼ですが、怖い方だと聞いていたものですから」

「その情報はどこで仕入れましたか？」僕の方に少し向き直って松本教授が尋ねた。

桜井から直接聞いたわけではない。そうだ、インターネットだ。ネット上の検索サイトで検索して、上位の数ページに出てきた情報から判断している。

「インターネットです」

「やっぱりね」

松本教授は、やれやれ、という表情をしながら続けた。

「実は今、社会学科の竹原先生と共同で、インターネットを使った実験をしましてね。ネット上の人物評の影響がリアルの人間関係にどのような影響を及ぼすかを調べているところですよ。私の場合は、ネット上では『頑固で気難しく、学生にも恐れられている冷徹な鬼教師』というキャラクタ設定になっている。つまり、検索サイトで上位に出てくるウェブページは、すべて私の息の掛かったページというわけ」

「そんなことが可能なのですか」

「だって現にできてるじゃない。それに君もちゃんと騙されてるし……」
と言つて笑つた。そして急に真面目な表情になつて、

「ネット上の情報は底が浅いし、ウソも多いということを、すべてのインターネット利用者が完璧に理解すべきではないのかね。特に数学以外の自然科学者がネットに依存しすぎると致命傷になるよ。本来、自然界には底が無いからね」

と一気にまくし立てた。

「それにしても、君も騙されやすい人だねえ。サイエンライターには向いてないんじゃないのかな。がっはっは……」

まだインタビューも実験も始まっていないのに、いきなり強烈なダメーヂを受けてしまった。少し涙目になったのを悟られたのか、松本教授は穏やかな声でこう付け加えた。

「もつともネットには利点も多いし、今からネット無しの生活に戻ることにはできないから、ネットという道具との距離感の問題とも言えるんだけど……。少なくとも、《ネット上で目立っているように見える意見》は鵜呑みにするな、ということを中心に留めておいた方が良いのではないかな。真の知はネットからではなく現実世界からしか得られないということさ」

松本教授はコーヒーを用意するために席を立った。改めて研究室内を眺めてみる。研究室の半分が、今自分たちのいるミーティングスペースで、もう半分が実験スペースになっている(桜井の研究室と同じような構成だ)。実験スペースの窓側半分にはコンピュータがずらりと並んでいて、大学院生と思われる男子学生が一人、ヘッドホンを付けたままキーボードに向か

っていた。実験スペースの廊下側半分には、一辺の長さが二メートルくらいの大きな黒い金属製の立方体が二つ並んで設置されているのが目立つ。

松本教授が二人分のコーヒーを持って来て、ミーティングスペースのテーブルの上に置いた。

「ちよつと濃いかもしれないけど、そのミルクを幾ら注いでも構わないから」

鶏卵に似た白い磁器のミルク入れから細長いケーブルが出ていて、その先はテーブル上のノートパソコンにつながっていた。ノートパソコンの周辺機器端子から電源を供給して、ミルク入れの容器ごとペルチェ素子（電位差と温度差を相互に変換できる素子）で冷却しているのだそうだ。ミルクを入れることを前提に、内蔵されたバイオセンサーでミルクの新鮮さ（つまり安全性）のチェックを常時行い、もし問題があればノートパソコンから警告を発するようにしている。なかなか手の込んだ《作品》だが、これは趣味の電子工作だという。

「色々な研究をされているようですが、松本先生のご専門は何ですか？」

と尋ねてみた。さすがにまだ「松ちゃん」とは呼べない。

「ああ、学問分野としては生物物理学と意識工学になるけど、そういうったカテゴリーはあまり意味が無いよね」

松本教授はコーヒーをすすりながら話し続ける。

「私も御多分に洩れず、若い頃は脳内の情報処理に興味があつてね。日夜、動物の神経細胞を使った電気生理学的な実験を繰り返したよ。でも、ある時、気付いたんだ。こんなことをしていても壁を越えることはできないとね」

「その壁とは？」

「もちろん……、意識だよ」

しばらく沈黙が場を支配した。

「意識は外部から客観的に存在を確認することができない。私は自分には意識があることは分かるけれど、君に意識があるかどうかは分からない。君が実は《意識があるように振る舞っている精巧なロボット》かもしれないからね。いわゆる《哲学的ゾンビ》というやつ。これは立場を変えれば、

君から私を見た場合にも当然あてはまる」

「はい。ここまででは理解できます」

「つまり意識の謎は……意識の実体はどこにあるのかという問題や、意識の発生するメカニズムは、従来の科学の枠組みでは説明できないんだよ。意識は、科学の研究対象である客観的実在ではなく、主観的実在なんだ」

主観的実在という言葉がとても新鮮に響いた。

「意識の謎に迫るためには、意識が発生している場、つまり少なくとも意識があることが判明している自分自身を利用しない限り分らないのではないか。そこで、脳に外部から様々な刺激を与えたときに、自分がどのような意識状態になるかを調べることにしたんだ」

「外部から与える刺激には何を用いるのですか」

「最近では電磁波と音波に落ち着いている。ここに至るまでに、物理学的手段だけではなく化学的手段も試したけど、その……まあ……何と云うか……合法・非合法を問わずクスリの類も一通り試したけど、ありやダメだね。地獄を見ることになる。肉体の負担も大きすぎるし……。あ、こりやおフレ

コかな。がっはっは……」

マッドサイエンティストだ。でも、こういう人は嫌いではない。

「君にも後で実体験してもらおうけど、あそこにある黒い小部屋ね、『ブラック・ブース』略して『BB』と呼んでいるけど、あの部屋の中の電磁波と音波はコンピュータで自在に制御できるようになっている」

「人体にとって危険ではないのでしょうか」一番気になる質問をぶつけてみた。

「その心配はない。電磁波も音波も、どちらも携帯電話より弱いものを使っている。……もつとも、現在の携帯電話の基準が安全なら、という条件が付くけど」

「弱い電磁波と弱い音波だけで脳に変性意識状態を作り出せるものでしょうか。どうも信じられません……」

「はじめは皆そう言うね。でも、体験すれば一瞬で理解できる。電磁波も音波も、振幅より波長の方が重要なんだ」

僕たちの住む世界は電磁波や音波で満ち満ちている。光も電波も電磁波

の一種だし、空気が振動していれば人間に聞こえる音であっても聞こえない音であっても音波である。普段生活していて突然、変性意識状態に陥ることがないということは、脳を変性意識状態にする《鍵》のような極めて狭い波長域（もしくはそれらの組合せパターン）が存在するという事か。

「個人差はあるけど多くの人が非日常的な体験ができたと報告している。あと面白いのは体験する回数を重ねることで学習が進み、非日常的な体験の幅が広がっていくということだね」

「今、『体験』とおっしゃいましたが、どのような『体験』なのでしょうか」
「映像が見える。あと、音も感じられる。それから……」松本教授が別の例を探している間に、以下の質問を重ねてしまった。

「ということは、BB内の電磁波と音波によって脳内の視覚野と聴覚野が直接刺激されて、特定の映像が見えたり特定の音が聞こえる、ということでしょうか」

「うーん、それは違うな。電磁波や音波を直接感じているのではなく、それらは変性意識状態に入るためのきっかけに過ぎない。一旦、変性意識状

態になつてしまえば、彼岸の世界を自由に散策できるようになる」

「ちよつと待つて下さい！ 彼岸？ 何ですかそれは」いきなり突拍子もない言葉が出てきたので、声を張り上げてしまった。

「ああ、すまない……。まだ説明してなかつたけど、我々の存在する世界をこちら側の世界という意味で『此岸^{しがん}』、B Bで変性意識状態になつてから入つていく世界をあちら側の世界という意味で『彼岸^{ひがん}』と呼んでいるんだ」やはりこの松本教授、トンデモ系のアブナイ人だったか（まさに「あちら側の世界」の人間のようだ）。まあ、それならそれでも構わない。記事の書きようはある。

「彼岸つて、どんな世界なんですか？」ここで小馬鹿にした素振りを見せてはいけない。あくまでも誠実に、そして面白い話を引き出すのだ。

「詳しくは調査中だけど……。とにかく広大な領域でね、あ、いや君には実験の前に先入観を持ってもらいたくはないので、今は多くを語らないようにしておこう」

彼岸の《世界》だなんて大げさな……。おおかた夢を見ているか、ある

種の幻覚でも見ているのだろう。その時は確かにそう信じて疑わなかった。

「じゃあ、詳しい話は後で続けるとして、とりあえずBBを体験してもらおうかな。精神的に落ち着いていた方が成功する確率が高いので、事前にトイレに行っておくのが良いと思うよ」

さあ、いよいよ実験開始だ。松本教授のアドバイスに従いトイレを済ませてから研究室に戻って来ると、BBに電源が投入されていて、すぐ脇にある制御卓の前に松本教授が座り、何やら準備のための操作をしていた。体験前にBBの写真を撮影しておきたかったので、許可を得た上で様々な角度から撮影した。近くで見ても表面の仕上げが丁寧で高級感があるので、試作品ではなく完成品のように見えた。

「えーと、BB内は電磁シールドで守られているので、外部から電磁波は入りません。しかし……内部から電磁波を発信されると実験の障害となるので、携帯電話やPHSは電源を切るか内部に持ち込まないようにして下さい。また、防音壁が音を遮断するので、BB内外の会話はハンズフリー

電話のスタイルで行います。それから……気分が悪くなった場合など、緊急時には座席脇の赤い大きなボタンを押せば脱出できるようになっています。入室したら、まず、この赤ボタンを確認して下さい」

手元の冊子を読み上げる松本教授の口調が接客マニユアル的とはいえ急に丁寧になったので、思わず真剣に聞き入ってしまった。BBの被験者には丁寧な言葉遣いで案内するルールになっているのかな、などと考えながら、やや重い扉を開けてBB内部へと入った。

外装は黒光りした金属の立方体なので男性的なイメージだが、内部は柔らかな色調で統一された女性的なイメージである。天井には面全体が一樣に光るタイプの照明が採用されており、その明るさは手元の有線リモコン（電磁場への影響を抑えるためか、ケーブルが電線ではなく光ファイバーだ！）で調整できる。座席と言ってもソファアーベッドのような大型のものが設置されていて、体験者自身がリラククスできる姿勢であれば座っても良いし横になっても良いとのことだ。なお、緊急脱出用の赤ボタンはすぐに見つかった。

「それじゃ、扉を閉めますから、気持ちを楽しませて下さい。必要な指示は外部から音声で伝えます」

扉が閉められた。外界の音が消えて、かすかに自分の呼吸音が聞こえるようになった。そしてすぐに、この小部屋が特殊な空調で管理されていることに気付いた。深い森に入ったような清涼感が広がる。実際に酸素も多いのだろうか、呼吸も楽なように感じられた。

「始めます。目を閉じていた方が映像が浮かび上がりやすいかもしれません。あとは……、リラックスして下さい」

ハンズフリー電話のスピーカーから聞こえてくる音声は明瞭で非常に聞き取りやすかった。ちなみに、すでに目を閉じて座っていたので、BB内の様子は監視カメラではチェックされていないのかもしれない。

可視光以外の電磁波を知覚することは困難なので、目を閉じていることもあり、電磁波を感じることはあきらめ、音波の方に絞ることにした。どのような音が聞こえてくるのか聴覚に意識を集中していた。空調の「シャ―」という雑音が少し大きくなったこと以外は特に変わったところはない。

しばらくすると、「キーン」という耳鳴りのような音が聞こえ、ほぼ同時に脳裏に映像がぼんやりと浮かんできた。大昔の白黒フィルム映画を観ているような、ノイズの多い映像だ。その映像は、広大な平地の上に大きな看板が一枚ポツリと置かれている、というものだった。看板は今、私の目の前に見える。看板の表面には、左向きの矢印が描かれていた。その矢印の方向へ進むもうと思うと、視点がスーッと移動して、矢印の先にある物体（矢印が指し示していた物体？）が視野の真ん中に来た。それは巨大なトグル・スイッチのようなもので、宙に浮かんだ直方体の箱から細長い円柱のレバーが横に飛び出しており、そのレバーが上下に動くような構造になっているように見える。現在は上に固定されていた。

「何かイメージが見えますか？」と松本教授。僕は「はい」と目をつぶったまま答えた。実にシュールな映像だが、見えていることは間違いない。「何か動かさせそうなものがあれば手を伸ばして動かしてみてください」松本教授の音声ガイドが続く。

一応、辺りを見回してみたが、近くにはスイッチと看板しか見えない。

このシチュエーションでは、スイッチのレバーを動かすしか選択肢がなさそう。しかし、「手を伸ばす」と言っても、どうすればいいのかわからない。とりあえずスイッチに近付き、心の中で手を伸ばした様子を想像したところ、驚いたことに映像の中にも手が出てきてスイッチのレバーまで手が届いてしまった。指先が金属製のレバーに触れると、ひんやりとした感触が伝わってきた。リアルだ。そのまま鉄棒を握るようにしっかりとレバーを握り直して、心の中で下向きに力を加えてみた。動かない。が、力を加えているという感覚は肉体におけるそれに近いので、このフィードバック情報を利用すれば力加減を調整しやすいことに気付いた。再び気を取り直して、下向きにより強い力を加えてみる。お、動いた。やや《バネ》が強いようだが、半分まで動かせばそこから先は勝手に動き、反対側にパタリと跳ね返った。現在、スイッチのレバーは下に固定されている。

「動きましたか？」

「はい」なんだか誇らしく、ちよつと嬉しかった。

「では、電磁波と音波の組み合わせを変えてみます。しばらく、お待ち下

「ささい」

そう言えば、いつの間にかあの耳鳴りのような音は聞こえなくなっていた。すると突然、「ブーン」という非常に大きな音が響き渡った。「先生っ、うるさいよ！」と叫んでみたものの、鳴り止まない。ハンズフリー電話にもこの爆音が入っているので僕の声が聞こえていないのか？ BBの音波は携帯電話よりも静かなんじゃないのか、くそっ騙された（でも、お笑い科学レポート『当たって砕けろ！』の取材記事的には、ある意味オイシイ展開だ）。仕方なく、再び映像に意識を集中してみる。相変わらず古い白黒フィルム映画の画質だが、内^{コンテンツ}容が変わっていた。今度は情報量が多い。しかも見覚えのある景色だ。「何処だったっけ」と記憶を探っているうちに「ブーン」という音は消えていた（音量が大きすぎることにやっと気付いたか、やれやれ……）。そうだ分かったぞ、この景色は実験物理学の木造校舎の外観じゃないか。だが少し変だ。視点の位置が高い。宙に浮いているようだ。周囲を見回してみると確かに木造校舎の外、地上4〜5メートルのところらに浮かんでいた。おや、校門から誰かが入ってくる。若い女性

だ。ストレートのロングヘアーにロングスカート。かなりの美人である。でもどうせこれは夢か幻覚なんだ。誰にも見られていない。なら楽しんでやれと思ひ、普段はこんな軟派なことはいないのだが、その女性に向かつて「おーい」と大きく手を振ってみた。するとその女性はこちらに気付き一瞬びっくりした表情を浮かべたが、すぐに笑顔になって「はーい」と小さく手を振り返してきた。大きめのネックレスを二重三重に首から下げてゐる。ジャラジャラと様々な形の石がたくさん付いていて、色はよく分からないが、心の目を凝らして集中すればそれらの石の色の違いを感じ取れるような気がした。形だけではなく色も認識するためにはある程度、練習が必要なかもしれない、などと考えていると突然またあの「ブーン」という非常に大きな音が聞こえてきて、集中を妨げられた（まったくもう勘弁してくれよ……）。せっかくいいところだったのに、そのまま映像も消えてしまった。

ここで僕は目を開けて、「松本教授、実験を中止して下さい！ このBBは壊れてます！」と声を張り上げ、例の赤ボタンを押そうと座席脇に手を

伸ばしたところ、

「何だって？ 分かった！ 三十秒ほど待ってくれ。彼岸からの脱出シークェンスを実行するから」

という松本教授の声がBB内に響いた。そして十秒ほどで「ブーン」という音は聞こえなくなり、それから二十秒後にBBの扉が開いた。

「どうした。大丈夫か」

「先生。何ですかあの『ブーン』っていうものすごい騒音は」

松本教授の目は真剣に私の表情を捉えていた。が、緊急性を要する事故ではないことが分かると、ほっと安堵した様子で、一転芝居掛かった態度になり、

「ほう、BB初体験でブーン音が聞こえたか。そりゃ素晴らしい！」
と言った。僕はムツとして、

「ひどいじゃないですか、携帯電話よりも静かなんじゃないんですか……。この件は書かせてもらいますよ」

しかし松本教授は平然と、

「ああ、ぜひ書いてくれたまえ。但し、正確に。ブーン音は、BB内ではなく、君の脳内で鳴り響いていたのだと」

「僕の脳内？」

「ああ、よく体外離脱するとき聞こえるのだ。私もこれまでに何度も聞いている」

「体外離脱？」

「実際、BB内で流している音はかなり小さいので、ほとんど意識されな
いと思うよ。振幅よりも波長の方が重要だって、さっき言っただろう」

「じゃあ、あの『キーン』という耳鳴りのような音は？」

「それは正真正銘、君の耳鳴りだろう。がっはっは……。それも君の脳内
で鳴り響いていたものだよ」

「耳鳴り……」

「だが時として重要なメッセージを含んでいることもある。まあいい。本
当におつかれさま。じゃ外へ出てヒアリングさせてもらおうかな。君の体
験談を聞かせて欲しい」

B Bを出て扉を閉め、僕はミーティングスペースのテーブルへ向かって歩き出した。と、その時、研究室のドアがノックされて、松本教授が「はい、どうぞ」と返事をした。ドアが開いて誰か入って来る。無意識のうち僕もそちらへ振り向いて、思わず息を呑んだ。そこにはB B内で見ただの若い女性が立っていたからだ。

「あら、先程はどうも……」

B B内で見えた脳内映像と同様、人なつっこい笑顔でまた小さく手を振ってきた。今度は映像ではない、生身の人間である。予想しない展開の連続に僕はどう反応すればいいのか分からず、その場で硬直してしまった。

「あれ？ 知り合いだったの？」松本教授の目も点になっている。

そこへ、さっきまでコンピュータに向かって作業していた院生と思しき男子学生がもう一台のB Bの中から出てきて、

「彼岸で知り合ったみたいですよ。派手にナンパしてましたから……」
と言って皮肉っぽく笑った。

ミーティングスペースの隅にある小テーブルを四人で囲んで座った。松本教授が他の三人を順に紹介する。

「こちらは青池素子さん。占い師です、本物の。それから、うちの研究室の大学院生で博士課程の石川くん。こちらはサイエンスライターの森健太郎さん。今日はB Bの取材です」

僕は完全に頭が混乱していて、とりあえずこの極めて不安定な精神状態から脱したいと切に願っていた。

「は、はじめまして……。あまりにも不可解なことばかりで、気が狂いそうですね……。うなのですが……」

声が震えているのが自分でも良く分かった。今にも泣き出しそうな顔だったかもしれない。

「じゃあ、ここで一度、論点や疑問点を整理してみたらどうだろう」

松本教授が真面目な顔で提案した。僕はB B内での体験を時間順に丁寧に説明した。時々、松本教授や石川くんが笑いを押し殺そうとしている様子が見て取れたので、僕はさらに落ち込んだ。

「なるほど、ではまず一点目」

松本教授が手元のメモをホワイトボードへ書き写しつつ解説を加えていく。

《1. なぜ映像が見えるのか?》

「これは私にもまだ分からんねえ。ただ科学者であれば、どんなに奇妙な現象であっても、その事実の前には謙虚であるべきだと思うよ。そして隠されたメカニズムを探るのだ」

《2. 単なる脳内現象ではないのか?》

「前半の実験で、君がスイッチのレバーを下に倒した直後のタイミングで、私が『動きましたか』と尋ねたのは偶然だと思ってる? 実はあの時すでに石川くんがもう一台のBBの中に入っていて、君と同じ電磁波と音波を浴び、君と同じ映像を別の視点から見ていたんだよ。もう少し正確に言うると、君が彼岸でどのように行動しているかを逐一観察させてもらっていた。そしてスイッチが上から下に変わった瞬間にハンズフリー電話で私に報告してきたのさ。だから、この質問への回答は『各個人の脳内現象かもしれ

ないが、少なくとも他人との間で何らかの情報共有ができてくる』ということになる。……とすると、必然的に次の疑問が出てくると思うので追加させてもらおうと……」

《3. 情報共有の舞台はどこ?》

「看板とスイッチに関して言えば、あれは二つとも私が作つてあそこに置いたものだから、同じ電磁波と音波を浴びて彼岸のあの場所へ行けば誰でも見ることができはずだ。インターネット上の仮想三次元世界であるセカンドライフのようなもの、と言えば分かり易いかな? 個人が作ったモノを設置しておくのとそれを万人が見ることができるといふ点では全く同じ。ただ私にはデザインセンスが無くて、よく不格好なことを責められるけどね。がっはっは……。え、どうやって作ったかって? 彼岸の中には『こんな形のものを作り出したい』と強く念ずれば、誰にでもモノを作り出せる場所があるんだよ。そこでは、まさに想像力が創造力というわけ。びっくりだね」

《4. 金属の冷たさや力を加えている感覚があるのはなぜ?》

「これも分からんねえ。がっはっは……。こうした数値化できない生々しい質感のことをクオリアと呼ぶのは知っていると思うけど、ひとつ確実に言えるのは、こちら側の世界Ⅱ此岸であっても、あちら側の世界Ⅱ彼岸であつても、そこで起きている事象が同じであれば同じクオリアにマップングⅡ対応付けされているという事実だね。夢もそうだ。実に興味深い。此岸の対応付けは先天的に決まっているものだから変えられないけど、彼岸の対応付けはもしかしたら変えられるかもしれない。これまでの此岸における経験や先入観が邪魔しているだけなのかも……。いずれにしても、今後の大きな研究課題になると思う」

《5. 本当に体外離脱していたのか?》

「後半の実験のことだね。うーん、これは本当のところはまだ分からないけど、そのように考えると上手く説明できることが多い。ただ今回は此岸の時間と彼岸の時間が同期シンクロしていたようだけど、ズレていることも少なくない。つまり過去や未来が見えてしまっているらしいんだ。もつとも、自分の意思で好きな時間へ移動できるわけではないから、この辺をちゃんと

制御できるようにならないと『意識だけのタイムマシン』は作れないがね。がつはつは……」

「6. 彼岸では色が分からないのはなぜ？」

「これは個人差があるようだね。モノクロで粒子の粗いざらついた映像と
言う人もいるし、フルカラーで鮮明な映像と言う人もいる。彼岸の場所
よって見え方が違うと言う人もいる」

「7. 青池さんには「僕」が見えていたのか？」

「最後の大きな謎だね。これは本人から語ってもらおう」
青池さんは良く通る声で、ゆっくりと話し始めた。

「はい、見えていました。わたくし、子どもの頃から、靈感が鋭くて、よ
く幽霊とか、見えるんです」

僕はお化けではない、と思ったが、声に出してツツコミを入れるほどの
元氣も無かった。すると代わりに松本教授がその話を受けて、

「幽霊の話については研究者の立場としてはまだ何とも言えないけど、青
池さんが特殊な能力を持っていることは間違いない。だから客員研究員と

して我々の研究に協力してもらっているんだ。……実は、青池さんと初めて出会ったのは彼岸なんだよね。つまり青池さんはBBを使わずに独力で彼岸に入りできていたということになる。ちなみに現在のBBは二代目だけど、青池さんが内装のデザインを担当してるんだ」

「たしかに一代目はデザインが無骨すぎたから……」石川くんが笑いながら続けた。

未解明な部分も多く残されてはいるものの、何やら得体の知れない大きな体系が構築されつつあることを感じた。だが、まだ僕は納得できていない。

「これらのことを信じるしかないのでしょうか？」と弱々しく尋ねてみる。すると松本教授はハッキリした口調でこう言った。

「だから、そう簡単に信じちゃうんじゃないかって、必ず自力で確認しなきゃダメだって。客観的事実ではなく主観的事実なんだから、実際に自分で体験して確認したことだけが意味を持つ。信じることを強要したんじゃない、それこそ宗教団体になっちゃうよ。がっはっは……」

なるほど、他人がどんなに熱心に語っても言葉は単なる言葉でしかなく、その真実性が保証されているわけではない。主観的事実の場合、ウソかマコトかの判断は本人が実体験を元に下すしかない。逆に言うと、自分で知覚できない場合は、その存在を認めてはいけけないのだ。新興宗教や霊感商法をめぐるトラブルも案外こんなところに端を発しているのかもしれない。ここでふと、インターネット上の言葉に踊らされるな、という先程の松本教授の言葉が思い出された。

しばらくの間、誰も発言せず、各々静かに思考していた。が、突然ある問いが僕の脳裏に閃いた。

「自分の脳と他人の脳との間で、ある種の情報を共有できる場が実在しているとして、そのことが現代の科学にとって大きな意味を持つのでしょうか？」

と少々攻撃的な質問を投げしてみた。この問いに対する回答次第で、今の不安定な精神状態から脱するための暫定的な足場を組み上げられそうな気がしたのである。

松本教授と石川くんは共に「信じられない」といった表情を浮かべ、しばらくの間、顔を見合わせていた。先に沈黙を破ったのは石川くんの方だ。「従来の細分化された脳科学の研究成果の枠組みを壊さずに、それらを統合するための新たな視点を提供できる……かもしれない」

石川くんは「かもしれない」と小さな声で付け加えたが、可能性のレベルであっても僕にはとてもそんな大げさなものには思えなかつたので黙っていた。しばしの沈黙の後、今度は松本教授が口を開いた。

「石川くんは時々飛躍した物言いをするのが玉に瑕だが、もう少し順を追って説明しよう。そうしないと誰もついて来れないよ」

松本教授の説明をまとめると以下のようになる。

脳に関する未解明の謎は多い。記憶ひとつ取っても、映像や音楽や言葉や思考といった情報をどのようにコード化して保存しているのか、またどんなに古い記憶であっても瞬時に取り出せるのはなぜか。ある事物を作り上げている構成要素（例えば、リンゴの色や形や重さや手触りや歯応えや香りや味や名称といった様々な属性）がバラバラにならずに一つの概念に

統合されて把握できているのはなぜか。そもそもこうした質^{クオリテ}感が発生する仕組みもその手掛かりすらつかめていない。睡眠に関する研究は一見進んでいるように見えるが、実のところ脳に睡眠が必要な理由は分かっている。なぜ夢を見るのかも同様だ。そして最大の疑問は、なぜ意識があるのか……。こういった謎を従来の科学は基本的には「脳内の神経細胞^{ニューロン}の相互作用」だけから説明しようと努めてきた。しかし細分化された個々の事例についてはある程度、実験結果が蓄積されてはいるものの、それらを総合的な見地から統合する試みは見事なまでに失敗してきた。

そこで松本研究室では、こうした謎を解明するにあたり、そのメカニズムを「脳内の神経細胞^{ニューロン}の相互作用」だけに求めるのではなく、「此岸（脳）と彼岸（脳から独立して存在する場＝精神世界）との相互作用」にも拡張することを提案していきたい。言い換えると、人間の精神現象は脳だけではなく、その向こうに実在する「脳の有無とは関係なく広がる精神世界」があつて初めて説明がつく、とする立場である（哲学的には二元論に近い）。しかし当然ながら、一個人の脳内現象についてのみ調べている限りは、「脳

の有無とは関係なく広がる精神世界」の實在は証明できない（なぜなら、すべては個人の脳内現象として片付けられてしまうから）。そこで、他人の脳との間で「彼岸」を舞台に情報を共有できることを証明することで、まず「彼岸」の實在を確固たるものとし、次に人間の精神現象を成立させている広い意味での情報処理を「此岸（脳）内の処理」と「彼岸（精神世界）内の処理」とに振り分ける作業を行いたい、という壮大なシナリオを松本教授は描いている。

ここでやっと僕の投げた質問につながってくる。

「自分の脳と他人の脳との間で、ある種の情報を共有できる場が實在しているとして、そのことが現代の科学にとって大きな意味を持つのでしょうか？」

この答えはイエスとなる。そして、この事実を認めるところから新しい脳科学の時代が始まるのだという。

「実際、これまで多くの論文で謎とされてきた実験結果のうち少なくとも疑問点が、彼岸の存在を前提とすることで解決の糸口をつかめそうなんだ」

そう話す松本教授は真剣な表情だったが、少し戸惑っているようにも見えた。嬉しさよりも、ある種の不安が先行しているのは、誠実な研究者の証しだろうか。

「例えばこれは、まだ大きな声では言えないけど……最近、ある実験により、非常に重要なことを発見した……かもしれない」

松本教授は誰とも目を合わさず、その視線はテーブル上のある一点を見つめたままだ。

「もちろん君たちにも、いずれは各自、追実験で確認し、批判的に検討して欲しいのだけれど……」

そして慎重に言葉を選びながら、

「大脳の記憶の実体は、此岸∥脳内ではなく、彼岸∥精神世界の方に置かれていいる可能性がある」

と語り、しばらくそのままの姿勢で固まってしまった。視線はまだテーブル上を見つめていた。肩で息をしているのが分かる。

空気が重くなってきたと感じられた。なぜだか僕はいたたまれなくなっ

てしまい、つとめて明るい声で「では脳内の神経細胞ニューロンの結線シナプスが持つ意味は？何のために存在しているのでしょうか？」と尋ねてみた。すると松本教授は、

「神経細胞ニューロンの結線シナプスは、その記憶の実体が置かれている彼岸アドレスにおける番地アドレスを指し示していると考えれば辻褄が合う。つまり、インターネットのウェブで言うところのURLに相当する情報だけを脳内に蓄えているのではないか。例えば、あるホームページホームページのアドレスさえ分かれば、そのホームページホームページから情報をスルスルと引き出すことができるように」

と答えた。

「……とすると、彼岸アドレスは皆で共有しているわけだから、もし自分の記憶を保存している場所の番地アドレスが他人に分かってしまうと、自分の記憶を他人に覗かれる恐れもあるなあ。それはヤバイ、ヤバすぎるっ」

石川くんがおどけた口調で言ったので、皆が笑って、その場が少し和んだ。

「異なる文化圏にいても、同じ時期に同じ発明をしたり、同じ発想で文学

作品や芸術作品を作る事例は、良く聞きますよね。ある絵本作家の言葉を借りると、『同じ天使の声を聞く』と言うらしいですが、これも単なる偶然ではなく、発明者や作家たちは、無意識のうちに彼岸にある同じ《アイデアの泉》を見ていたのかもしれない」

青池さんはそう言いながら手元の白い紙に鉛筆で天使のラフなイラストを描いた。僕は「新しいことを思いつくときの感覚は記憶を探るときの感覚に似ている」と主張している学者がいたことを思い出した。

「しかも、それだけではなく、ある人間の肉体の死後も、その人間の生前の記憶が彼岸に残り続けるということも……。あ、いや、これは言い過ぎたかもしれない。すまない、忘れてくれたまえ」

松本教授はここまで言つて「しまった」という表情を浮かべた。この時、松本教授の頬が若干紅潮したように見えた。何だろう。たしかに奇想天外なアイデアではあるが、そんなに慌てて否定するような話でもないのに。他に何か隠していることでもあるのだろうか。松本教授らしくない行動だと思つた。

「あ、分かった！　もしかしたらユングの言う《集合的無意識》って、彼岸のことでは？」

しばらく黙考していた石川くんが突然叫んだ。ユングの集合的無意識は人類が共通して持っていると言われる無意識領域のことだが、各自の無意識領域の中に似たような《認識のための元型》があるという主張ではなかったかな。それとも彼岸のように実在する《個人を超えた共有の場》を想定していたものだったろうか。

この発言に刺激されたのか青池さんが語り始めた。

「スピリチュアルな分野の、歴史的な文献の幾つかには共通して、これまでのすべての人類の記憶が保存されている場所がある、と書かれています。《アカシック・レコード》と言うのですが、もちろん普通の人には見えません。でも能力の高い人なら、瞑想するなどして見に行くことができた、ということですよ。そこでは、自分の幼少期だけではなく、前世の姿も知ることができたいです。……まだ、わたくしには見えませんが」

と言って微笑んだ。ああ、やっぱりオカルト系の話になってきたか。困

るんだよな、怪しいとはいえ一応「科学」の取材で来ているのに、ここで「非科学」を持ち込まれると混乱するだけだ。一言、釘を刺しておこう。雑談としてオカルトの話をするのは構いませんが、ここでは実験事実の積み重ねを元に議論していきませんか。僕も今日すごく不思議な体験をしましたけど、オカルトを持ち込まずに説明することの方に興味があります」
すぐに反応したのは石川くんだ。

「良いじゃないですか。青池さんはスピリチュアルの立場からこの問題を考えたいわけだし、そこまで森さんが否定する権利は無いでしょう」
さつきから、なんか突っかかってくるなあ、彼は。

「まあまあ……。どちらの言い分もわかるよ」

松本教授が仲介に入った。

「ただね、我々は従来の科学の枠組みから少しはみ出した分野を開拓しなければならぬのだから、手続き的には可能な限り科学的に進めて行くにしても、その一方で発想のヒントを得るためにブレイン・ストーミング的にオカルトの知識を持っていることは無駄にはならないのではないかな。

効率良く次の実験テーマを方向付けることもあるだろうし……」

「そうは言ってもオカルトは科学的知識ではないでしょう。仮に部分的に正しかったとしても、どこまで信用して良いものやら」

と少し大げさに眉をひそめながら述べると、松本教授は違った切り口からの説明を試みた。

「人間の脳のハードウェア的な性能は少なくともこの数万年間は全く変わっていない。ではテレビもネットもない昔の人々が何も考えていなかったかという、そんなことはないだろう。人間は、入ってくる情報が少なければ自ら探求に行くものだ。具体例を一つ挙げると、約三千年の歴史を持つ中国の鍼灸にしても科学的説明はまだ追いついていないものの治療効果があることは明らかだ。今時、鍼のことを『ありや迷信だ』なんて言っている人間はいないだろうね、君たちは大丈夫かな？　がっはっは……。ましてや特殊な道具を必要としないスピリチュアルな分野の探求に例えば中世の人々が我々以上の莫大な時間を費やしていたとしても不思議ではない。もちろん彼らの説明をすべて正しいなんて思っちゃいけないよ。でも、数百

年という時間のふるいをくぐり抜けてきた先達の研究成果には重要な『何か』が隠されていると思う」

たしかにそういう要素はあるかもしれない。僕も「何か」がありそのような気はしている。ただ、これが客観的事実を対象とする科学であれば、仮に着想が素人っぽいトンデモやオカルトであったとしても、実験結果の検証さえ厳格に行えば最低限のチェック機能は働くので安心なのだが、この研究室の研究テーマのように主観的事実を扱うジャンルであっても、同様のチェック機能は有効に働くと言えるのだろうか。

松本教授の説明が続く。

「……とはいえ時代の制約があるのも事実。実際、歴史的に見て、脳という臓器は何のために存在しているのか長い間まったく分からなかった。だから全身を駆けめぐる血液を冷却するための臓器だと考えられていた時代もある。信じられるかい、脳はラジエーターだよ」

皆が笑った。

「今は皆、笑っているけど、これはほんの数百年前の話だよ。現在の脳科

学の知識にしたって、あと百年後には大いに笑われている可能性が高い。極めて高いと思う」

皆が冷静な表情に戻った。

「精神現象が脳内の活動だけで作り出されているわけではなく、その裏側にもうひとつのまだ見えていない世界があり……、という視点は様々な示唆をもたらす。もちろん、未解明の精神現象の謎を、その《裏側の世界》へ先送りしているだけで安心しちやいけないよ。その《裏側の世界》についても研究が必要になることは言うまでもない。ただ、現在主流の科学的立場である《表側の世界》だけを調べていても、それは精神現象を成立させている基盤の半分しか見ていないことになるのではないか。それでは永久に真実には迫れないだろう。……まあ、本音を言えば、異端児の遠吠えに過ぎないのかもしれないけど、世界で一人くらいは私のような立場から研究する人間がいても良いんじゃないかな。保険のためにね」

と言つて悪戯っぽく笑つた。そして私の方を見て、

「それから、もしもこの件に関する科学論に興味があるのなら、毎週木曜

日に開催している竹原先生のゼミに出ると良いよ。私も参加しているけど、彼岸の实在を前提とした新しい科学の枠組みを構築しているんだ」

僕は成り行き上、参加することを伝えた。一〜二回程度なら様子を見てみるのも悪くない。

「あと森さん、あなたはBBと非常に相性が良いようだ。初回にして様々な成果が得られて私も驚いている。どうだろう、週一回程度で構わないから、被験者として我々に協力してくれないだろうか。もちろん謝礼はお支払いするよ」

こうして僕と実験物理学との奇妙な関係は始まった。

第二部 物理学部の人々

◎竹原誠（社会学科・准教授）

先日の取材は、いつもより笑える記事にまとめてしまったためか、作りの「ネタ」だと思ふ読者も多かったようだ。だが、おもしろおかしく読んでもらうために一部に誇張した表現は使われているもの、実験結果や教授の発言内容に関してウソはついていないはずだ。なお、「頑固で気難しく、学生にも恐れられている冷徹な鬼教師」というネット上の松本教授のキャラクタ設定はそのまま使わせてもらった。つまり僕も例の実験に協力したことになる（この点だけは事実と異なるが許されるだろう）。

実験物理学に通い始めてから約一ヶ月が経過した。週に一〜二回程度、松本研でB Bを用いた実験に参加し、毎週木曜の夕方から開催される竹原研のゼミにも可能な限り参加している。今日は別の大学での取材を終えて、これから竹原研のゼミに顔を出すところだ（かなり遅刻してしまった）。校

舎一階の廊下の突き当たりにある社会科学の竹原研究室に近付くと、教室の中から松本教授の大きな声が漏れてきた。

「……ベイズ推定に基づく確率論で脳内の情報処理プロセスを記述できたとしても、それは哲学的ゾンビを記述しているに過ぎず、クオリア質感などの主観的感覚を記述できていないからベイズ主義者は不完全なんだ、とする議論がある。しかし、仮に脳が此岸と彼岸を学習的つまり確率的に結合しているだけの存在とするならば、俄然、ベイズ主義者の立場は強くなってくるのではないか」

ここで僕は竹原研のドアをノックして中に入り、皆に会釈をした。ゼミのメンバーは全員そろっていた。センスの良いスーツを着こなす竹原誠准教授は松本教授の発言に同意した。

「なるほど。自意識の問題を彼岸へ丸投げしているという解釈であれば、此岸における情報処理プロセスの研究成果はそのまま必要十分ということになりますね」

竹原准教授は社会科学の教員だが、理学部の出身なので理系の論文も読

むことができる。大学院時代に専門を科学論・科学哲学や科学社会学に変えたのだそう。私の知る限り、実験物理学の中で最も常識的でまともな学者である（松本教授が変なのは周知だが、旧友の桜井もああ見えて実はかなり変なのだ）。松本教授と竹原准教授は性格的に正反対のタイプだが、なぜか馬が合うようで、複数の共同研究プロジェクトが進行している。

「少し脇道にそれてしまいましたでしたが本題に戻ります。意識と認識の関係についてですが、世界を認識するためには《選択する意思》が必要になるところまではよろしいでしょうか」

竹原准教授が手元のノートパソコンの画面上でペンをすらすらと走らせると、ミーティングスペースの壁に掛けられた大型のスクリーンに幾つかのキーワードが投影された。このシステムは複数名で共有できるホワイトボードのようなもので、出席者全員のノートパソコン上でペン入力することにより、いつでも誰でも自由に「ホワイトボード」上の議論に参加することが可能となっている。

「この解釈は彼岸の話を持ち出すまでもなく、従来の科学の範囲に収まる

ものです。つまり、意識が世界を認識する際に、もともと世界自体に区切りはありません。ひとつながりです。一樣な世界がボワンと広がっているだけ。私たちは便宜上、ある《選択》のもと、世界を構成する要素に切り分け、それら要素の単位で世界を見ている。把握しているに過ぎません。逆に言うと、《選択》がなければ、世界を分類し認識することは不可能です」

竹原准教授は、中心に「世界」と書かれた大きな円を多数のランダムな直線でメッタ切りにした。するとスクリーン上の「世界」はバラバラになり、各々のパーツの位置がアニメーションして、少し広がったところで静止した。

「ごめんなさい。途中から参加したのでよく分からないのですが、例えばここにいるゼミのメンバー九名を分類するとして、男女に分けるのは自然なことではないでしょうか」

実験物理学に通うようになってから僕は少しでも不安な事柄があれば臆せず質問するようになった。知らないことや理解できないことは、それを認めないことに比べたら恥ずかしいことではないからね。

「しかし、人の分類の仕方は様々です。森さんは男女で分けましたが、髪の色や服の色で分ける人もいるでしょうし、目に見えない属性、例えば体温や血糖値や年齢や所属学科や年収で分ける人もいるでしょう。これら様々な属性の中のどこに注目するかは観察者によつて異なります。銀行員は、人々の性別や身体的特徴や性格などには全く興味を示さず、年収と資産と借金の金額しか目に入っていないはずです」

皆が笑った。竹原准教授は説明を続ける。

「それらの分類はきれいに分かれることもあるでしょうし曖昧さが残るところもあるでしょうが、いずれにしても分類するための項目の数はそれこそ無数に存在します。あなたの右隣に座った人との類似度と、あなたの左隣に座った人との類似度を比べた場合、あなたはどちらに近いでしょうか？という漠然とした質問には一般には答えられません。あえて答えるならば『同程度に似ている』ということになってしまいます。』どの項目で比べるか』という《選択》が行われて初めて類似度の比較が行われ、一樣な世界の中からの対象の切り出しが可能となり、ひいては対象の認識が可能にな

るわけです」

竹原准教授は再びスクリーン上の「世界」を分割前に戻し、先程とは別の切り方で分割し直した。

「ということとは、森さんは異性のことしか興味がない、異性のことしか認識していないということだな。がっはっは……」

松本教授はまた僕が笑えないジョークを飛ばした。

「ここまで説明すれば類推できると思いますが、これは人間の分類だけではなく、この世界を構成するあらゆる存在が対象となります。『醜いアヒルの子の定理』として広く知られているこの定理の数学的証明は先程、院生の石川くんが行いました」

と言つて竹原准教授はスクリーン上に、数ページ前の「ホワイトボード」に書かれた数学的証明を表示した。

「本人が意識しているか無意識かはともかく、認識するには〈選択する意思〉が必要になるということ。よりシンプルに、あえて言い切ってしまうと『認識とは決めること』とも言えるのではないでしようか」

竹原准教授の説明は分かり易い。今日、出席して良かった。タイムリーな話題なので、ついでにもう一つ質問させてもらおう。

「実は今日、ある大学の工学部へロボットの視覚の研究の取材に行ったのですが、オーソドックスな手法ではありませんが、コンピュータを使って画像認識をしていました。言うまでもなくそのプログラムは研究者が書いているのですよね。この場合、《選択する意思》はロボットではなくその作者である研究者が《決めた》という理解でよろしいでしょうか」

「本質的には、その通りです。ロボットには《選択する意思》は無く、コンピュータ・プログラムは単に情報を変換して伝えるだけの、言わば《通路》に過ぎません。……そして恐ろしいことに、その類^{アナロジー}推で考えると、これは人間の認識における此岸と彼岸の関係にも当てはまるかもしれないのです」

「それは、どういう意味ですか？」

私の重ねての質問に竹原准教授が答えようとしたが、松本教授が割り込んできた。

「つまり、脳は情報を変換するだけの《通路》に過ぎず、意識の実体はその向こう側＝彼岸のみに存在するのかもしれない、ということだよ。ちなみに私の予想は『意識は脳と彼岸との相互作用から生じている』というものだが、ここではもつと過激な『意識には脳すらも不要である』という立場のことを指している。此岸の世界にある様々な情報を、彼岸にある意識の本体にとって理解しやすい形式に翻訳するのが『脳』という臓器の仕事だという立場だね」

なぜかふと「幽霊が見える」と言っていた青池さんのことが思い出された。幽霊には脳がない。もし本当に幽霊が存在するとしたら……。

「可能性が無いとは言えないけど、実験による裏付けがね……」

松本教授はそう言って、スクリーン上の「ホワイトボード」に汚い字で「脳が無くても意識の存在を証明できる実験方法は？」と書いた。

「松本先生はそうおっしゃるだろうと思ってきましたが、私は意外にその可能性は低くないのでは？と見ています」

いつも慎重で几帳面な竹原准教授がこんな発言をしたので僕は少なから

ず驚いてしまった。竹原准教授は続ける。

「これまで科学は唯物論をベースに発展してきました。こう言うと『唯物論は意識や心の存在を認めていない、もしくは二次的なものとして軽視しているのではないか』などと頓珍漢な言いがかりを付けてくる人がいるので困ってしまうのですが、どこかの宗教団体のデマに騙されてはいけません。唯物論自体にも千年単位の歴史があり、進化を続けてきています。少なくとも誰の唯物論に対して批判しているのかは明らかにして欲しいものです。ね。例えば、二十世紀初頭の哲学者レーニンの唯物論では、『人間の意識の外に、意識から独立して存在する客観的実在』を『物質』と定義していますが、これは近現代におけるかなり強力な『科学的認識のための基準』となります。この『物質』に対して、実験や実践といった具体的な手法を用いて、その真の姿を探るべく永久に近付いていこうとする運動が唯物論である、というわけです。念のため補足すると、意識の存在を十二分に認めているからこそ『意識は物質ではない』と言っているのですね」

ここで竹原准教授はミネラルウォーターを飲んで小休止した。皆は黙っ

て聴いている。

「さて近未来の科学論を予想すると、BBを用いた実験結果や彼岸の存在について否定する立場に固執することは得策ではないでしょう。特に、ここにいる九名は全員、BBや彼岸のことを『信じている』のではなく、実体験として『知っている』わけですから、なおのこと保守的なスタンスは取りにくいのではないかと思います。やはり、従来の科学の枠組みは基本的に維持しつつも、これら奇妙な現象をも包含できる『新たな科学的認識のための基準』が必要になるのではないのでしょうか」

「たしかにレーニンによる『物質』の定義はかなり幅広い対象を扱えるようになってはいますが、BBや彼岸を扱うには不十分ですよね」

竹原研の学部四年のショートカットの女子学生（名前は知らない）が発言した。「……彼岸に関して言えば、『人間の意識の内に、意識から独立して存在する主観的実在』を取り扱う必要があるわけですから」

「『主観的実在』は良いと思うけど、彼岸は『意識から独立している』と言えるだろうか」

すかさず松本教授がツツコミを入れた。するとその女子学生は、

「うーん、そうか……。想像力による創造力を駆使して彼岸内でモノを作つて彼岸内に設置することはできませんから、その意味では意識から独立しているとは言えませんね。でも一旦設置したモノは特に努力しなくても、それを維持するためのエネルギーを使わなくても彼岸のその場所に置かれ続けますよね。これは此岸の……現実の物理世界にそっくりです。あつ、分かったかも。……ということは、意識にも二種類あつて『個人の意識領域』と『皆で共有している意識領域』に分かれるのでは？」

と答えた。まだ若いのに、この短時間で随分と鋭い考察をする、と僕は感心してしまった。竹原准教授は満足そうに微笑みながら、

「そうそう、その調子……。これまでに判明している実験事実からでも哲学的思索をかなりの部分まで展開できるので、これからも考え続けて下さい。江崎さんの卒業研究にも深く関わつてくると思いますよ」

とその女子学生に向かつて話した（江崎さんと言うのか……。）。そして次に全員へ向けて、

「近い将来、彼岸の实在が人類の常識となる時代が必ず訪れます。その時に人々を不安に陥れることなく、新時代にスムーズに適応できるように、人類を上手く着地させたい。一步間違うと悪徳業者のエセ科学や宗教団体の宣伝活動に悪用されてしまう恐れが多分にありますから、何とかしてそれは食い止めなければなりません。つまり、ニュートンの物理学をアインシュタインが拡張したように、レーニンやそれ以降の唯物論を拡張しておく必要があると考えています。もし仮に『意識には脳すらも不要である』という究極の立場からでも矛盾しない確固たる科学の方法論を構築できれば、人類の知識の共有と発展に大きく貢献することになるでしょう」

と語った。竹原准教授はそこまでスケールの大きなことを考えていたのか……。何だか自分の存在がとても小さく思えて情けなくなってきた。いつまでも「お笑い科学レポート」を書いていて良いものだろうか。

「次回のゼミは趣向を変えて、学外からゲスト講師をお呼びします。『物語と彼岸』と題して、物語論・物語工学の佐藤先生に最新の研究成果を紹介して頂きます。神話や昔話の構造を詳細に分析することで『物語とは精神

活動を含む因果性のことである』と証明した研究者ですが、なぜドミノ倒しのような物理的な因果性だけでは物語にならないのか、また精神活動に潜む非線形性が物語に及ぼす影響について、お話を伺えることになっていきます。さらには文学というジャンルにとどまらず、人類の精神史についても『此岸と彼岸との間の情報のキャッチボールによって発展してきた』という大胆な仮説をお持ちです。楽しみですね。では本日のゼミはこれで終わりです。お疲れさまでした」

◎梅田秀樹（物理学部長・教授）

ある日、いつものようにBBの実験を終え、実験物理学の校舎の廊下を歩いてみると、桜井に呼び止められた。

「これからうちの学部長の講演があるんだけど、聴いてみないか」

そう言えば、まだ学部長さんには会ったことがない。幸い今日は時間もあるし、ちょうど良い機会だから講演後に少し挨拶させてもらおうと思い、桜井の後を歩いて行くことにした。

講堂（体育館）へ向かうのかと思っていたが、なぜか桜井の研究室に入った。桜井は執務机のところにもう一つ椅子を持ってきて僕に座るよう促した。そして机上の大型ノートパソコンを開き、ウェブブラウザを立ち上げ、ブックマークから「梅田先生ストリーミング」と書かれた項目を選択した。

すると、ノートパソコンの画面いっぱいには白髪の老紳士が映し出された。茶系のスーツに、アンティークなデザインの黒縁眼鏡という印象的な装い

だ。腕時計を気にしつつ、手元の紙の資料をチェックしている。まるで一風変わったニュースキャスターである。背後には窓が見えるが、どうやらネットの向こうは夜のようなようだ。

「これが俺たちのボス、梅田先生。あと三分後にスタートだ」

と言いながら桜井はノートパソコンに外部スピーカーを接続した。スピーカーからは音楽が流れてきた。

「講演って、ネットを使うのか」

「ああ。梅田先生は北米を本拠地に活動してるから」

「え？ だってこの大学の学部長だろ？」

「うん。でも、授業もするし、会議にも欠席したことはない。もちろん、ネット経由でね」

「……」

「講義科目だけではなく、実験の授業までやっちゃうんだから、すごいよな。もつとも、助教の長野さんが手足になって学生を指導するんだけど」

「なんで、そこまでして……」

「教育熱心だから」

「いや、そういう意味じゃなく、なぜアメリカの大学ではなく東京の郊外の小さな大学に籍を置いているんだ？」

「それは順番が逆だな。もともとこの大学、実物大において、ある研究のためにアメリカに長期滞在してるんだよ」

「何の研究？」

「……テロの研究」

「は？ 梅田先生って、物理が専門なんだろう？」

「専門は構造力学なんだけど、『九・一一以降数年間の米英の態度がどうも怪しいから調べてくる』って飛び出しちゃった。言語学者のチョムスキーが文系の立場から積極的に発言しているけど、あれの理系版が必要だと言っ……」

「じゃあ、世界貿易センタービルが崩壊した過程を解析してるんだ」

「それだけじゃないけどね。少なくとも、アメリカ政府の調査報告のレベルが低くて、『これじゃ、単位を出せない。落第だ』と」

「あはは……。面白い人だな」

「人命に関わる話だから笑い事ではないんだけど、ただその後の世界のあり方が変わってしまうような歴史的な大事件の割には、拙速な分析で幕引きしたがっているのは不自然だ、と。アメリカ政府自ら科学的調査を拒んでいるように見える、とも」

「ふーん」

「おっ、そろそろ始まるぞ」

音楽がフェードアウトして、画面の中の梅田教授が少し枯れた声で語り始めた。

「えー、皆さん、こんにちは。梅田秀樹です。二〇〇一年の同時多発攻撃について研究しています。まずは、こちらの映像を御覧下さい……」

約一時間後、梅田教授のネット講演は終了した。九・一一については、米政府の説明も、陰謀派（米政府が関与していたとする）の説明も、それに対する反論も、どれも安易に受け入れることはできない。各々の立場の

《思惑》については人間が頭の中で考えることⅡ主観なので何とも言えないが、しかし建築物の崩壊過程については純粹な物理現象Ⅱ客観なので明らかに決着がつく問題であり、丁寧に科学的な検証をすべきなのではないか、というのが梅田教授の基本姿勢だ。特に、ツインタワー崩壊から七時間後に、飛行機が突っ込んでいないWTC7（世界貿易センタービル七号館）が突然、一瞬のうちに崩壊した事実については、公式には説得力のある解釈は提供されていない。講演の中でも、崩壊した瞬間の実写映像を繰り返し上映していたが、ビルが最初M字型に縮んだ後、一気に崩れ落ちるという不自然な壊れ方をしている。もし爆薬で崩壊したのなら陰謀派が有利に、火災で崩壊したのならその反対派（および米政府）が有利になるのだそうだ。ちなみに、四十七階建てのビル（しかも一部が火災を起こしているように見える）を爆破解体するために、たった七、八時間で計画的に爆薬を仕掛けることは事実上不可能なので、もし爆破説が正しければ、二機の飛行機がツインタワーへ突入する前に何者かがWTC7に爆薬を仕掛けていたことになる。

梅田教授による精緻なコンピュータ・シミュレーションの結果は、火災ではなく爆破の可能性が極めて高い、というものであった。WTC7崩壊の実写映像はネット上の動画共有サイトにも転がっているそうなので、あともう一度じっくり観察してみることにしよう。

音声は静かな音楽に切り替わったものの、画面はまだ梅田教授を映していた。

「なあ、桜井。梅田先生とお話してできるだろうか」

「ああ、つないでみようか。先生がお忙しくなければ……」

桜井はマウスとキーボードを使って、梅田教授とチャットを始めた。

「お、OKだつてさ。盗聴されないように別回線に切り替えるから待って
くれて」

「と、盗聴……されるのか」

「うん。それだけじゃなく、以前アメリカ人向けに英語でネット講演したときに、なぜか質疑応答のコーナーでストーリーミング映像がひどく乱れたことがあってね。それ以来ネット講演するときは複数のルートを確認した

上で、末端の受信状態に異常があればすぐに切り替えるようにしていると
も言っていた」

「うわあ、そこまでやるのか」

「そこまでマトクさわれているんだらうね。必要に迫られてシステムを構築
してるんだよ」

桜井が梅田教授に指定されたサーバへ接続すると、ノートパソコンの画
面上に先程よりもずっと小さなウィンドウが開き、梅田教授が笑顔で現れ
た。

「やー、桜井くん、久しぶり。さっきよりも細かい回線だから小さい画面で
済まないね。おお、後ろにいるのが、森さんだね。初めまして、梅田です」
ノートパソコンに内蔵されているカメラがこちらの様子を地球の裏側に
いる梅田教授へ伝えている。

「初めまして、サイエンスライターの森健太郎と申します」

「あなたのことは松本先生から聞いてますよ。BBを使った実験に協力し
て下さっているそうですね。ありがとうございます」

「こちらこそ、興味深いご講演、ありがとうございます。これまで W T C 7 のことはあまり意識してなかったもので、視野が広くなった気がします」

「僕はね、アメリカ政府が勝とうが、陰謀派が勝とうが、そんなことには興味がないんだ。ただ、誤った現状認識の下にどんなに議論を重ねても、それは時間の無駄だと思うからね。それどころか新たな戦争の引き金になっているのだとしたら害悪以外の何者でもない。やはり出発点は同時多発攻撃の科学的検証にあると思うんですよ」

「梅田先生はご講演の中でも『同時多発テロ』と呼ばずに『同時多発攻撃』と呼んでいましたが、それはなぜですか？」

「『テロ』と呼ぶと、そこにはある種の価値観が含まれるからね。九・一一の場合はアメリカ政府の側に立っていることになってしまふ。客観的事実を記述するには、ふさわしくないんですよ」

そうか、これが科学的検証のための視点か。これまでに自分が仕事で書き散らしてきたものの中に、不用意に特定の価値観に基づく用語を使っ
てこなかったか少し心配になった。

「梅田先生のように中立の立場から事実だけに基づき検証する科学者もいれば、その一方では政治的思惑で行動している科学者もいるんでしょね」
「そりゃ当然いるよ。日本も含め世界中にいるんじゃないかな？ まず結論ありきでそこへ向けて論文を書く学者なんてゴロゴロいる。特に『開発か環境か』といったジャンルや公害問題なんかは巨額のお金が動くから大企業も政府も必死だよ。環境アセスメントしてますなんて言っても実態は環境アセスメントだったりする」

「恣意的なデータ操作をした環境レポートを出してくる、という意味ですね」

「政治的に利用される科学者ほど哀れな者はないよ。政府や財界には重用されるから金も地位も手に入るだろうがね。……そもそも政治と科学が対立するなんて、人類はどこで道を間違えてしまったのだろう」

梅田教授は黒縁眼鏡を一旦外して、再び掛け直した。そして微笑みながらこう言った。

「ところで森さん。松本先生の研究のことだけど、意識が物質に影響を及

ぼす身近な事例を発見したよ」

「えっ、そ、それは是非、ご教授下さい！」

「筋トレだよ」

「はあ？」

「単に筋肉を動かすよりも、その筋肉のことをイメージしながら動かす方が、ずっと効率が良いみたいだ。この辺のことって研究してるのかな？」

「さ、さあ、どうでしょう……。私は聞いたことがありませんが……」

すると桜井が口を挟んできた。

「筋トレではありませんが、こんな話を聞いたことがあります。遺伝子を組み換えて乳糖を分解できなくした大腸菌を作り、乳糖だけの培地で育てると、通常は考えられない高い確率で突然変異が起こり、乳糖を分解できるようになったと。大腸菌に意識があるかどうかは分かりませんが、もし意識が物質に影響を与えたとしたら、こういう怪しい実験も説明できるよになるかもしれませんね」

梅田教授はそれに悪乗りした。

「じゃあ、キリンは自分の首を伸ばしたかったんだな。それで進化が速まったのだ。おお、かのダーウィン理論は不完全であった！」

梅田教授と桜井は盛大に笑った。二人とも自分の専門分野ではないから勝手なこと言ってるな、と思いつつも、意識や彼岸についての研究は生物の成長や進化論にもつながってくる可能性があることに気付かされた。いやそれだけではない。おそらく自然科学全般にコペルニクスの転回を引き起こすのではないだろうか。

ネットの向こうの梅田教授に改めて感謝の気持ちを伝え、再会することをお約束した。じつに充実した時間であった。

「一息、入れよう」と言いながら湯飲み茶碗に緑茶を注いでいる桜井に、梅田教授のネット講演について、

「元物理屋の直感によると、あの映像を見た瞬間に、火災じゃなくて爆破だと思っちゃったよ」

と感想を述べると、

「物理屋の直感に頼るまでもなく、あれはどう考えても爆破解体だろう」と桜井が大笑いしたので、僕もつられて笑ってしまった。

「だいたい未だに火災で崩壊したと信じている一般人がいるっていうのは、どういうことだろう。はっきり言って、力学的センスが無さすぎる。別に物理学を修めるまでもないんだよ。自然の中で遊んだことがないのか？というレベル。脳内に物理世界のシミュレーション・モデルが構築されていないところに、解説しているマスコミや御用学者が有名ブランドだったりすると、コロツと騙されちゃうんだろうな、きつと」

「それにしても梅田先生は親切に説明してたなあ。あそこまで丁寧にやらなきゃいけないのか」

「いやいや……、コンピュータ・シミュレーションは単なるシミュレーションに過ぎないと難癖を付けてくる連中は必ずいるから、このやり方でもまだ不十分だと思うね。理想を言えば、安全な場所にWTC7のコピーを建てて、実際に火災を起こしてみれば良いんだよ。それで本当に一瞬で崩壊するかどうか実験で確かめるのさ。どんなに強硬な反対派も認めざるを

得ないところまで持っていくのが科学の力だ！ ブランドもマスゴミも糞くらえ！ 客観的事実の前にひれ伏すが良いっ！」

桜井は自分で言ったことに妙にウケて、ニヤニヤ笑っている。

「ああ、それ、実験物理学っぽい」

「だろ？ でも、うちの大学は超貧乏だから、その千分の一の予算もつかないけどな」

「……やっぱり貧乏なのか、この大学」

「私立の理系というだけでも苦しいことは分かるだろう。だから、名前は実験物理学だけど、大規模な実験施設を作れないので、実験室物理学と揶揄されている」

「あはは……」

「高橋先生のように、いくら粒子加速器が欲しいからって、普通そのミニチュアのような卓上版を作るか？ 主リングの直径が一メートルだよ。非常に分かり易い当て付けだ」

「あはははは、おかしすぎる。……腹いて」

粒子加速器とは、電子や陽子やイオンなどの荷電粒子に電圧を掛けて加速させる実験装置である。素粒子物理学の研究に用いられるシンクロトロンは荷電粒子を加速させる主リングの直径が百メートルを越えることも珍しくない。

「もつとも、うちの先生方は少ない研究費をカバーするために実験装置から自前で作ってしまうことが多いから、実はそれが幸いしてオリジナリティの高い研究につながっているのかもしれないけどな。災い転じて福となす。予算が少なければ少ないなりに工夫するものだよ」

「やせ我慢するなよ、笑顔がひきつってるぞ」

「……正直言うと、もう少し欲しい」

「実際、この大学には個性的な人材が集っていると思うよ。いや、大学が多くの変人を『飼っている』と言った方が近いかな」

『飼っている』はひどいな……。俺も、その中の一人か。まあ、でも、当たっているかもしれないな。うん、否定はしない」

「貧乏な大学なのに、なぜ優秀な人材が集まってくるのだろう」

「うちは良くも悪くも放任主義だからな。大学は何もしてくれない。その代わり自由に動ける。一匹狼タイプの研究者なら仕事がしやすいと思う」
「じゃあ、梅田先生がああいった活動をしてるけど、……たぶん外部から陰に陽に圧力を掛けられているとは思うんだけど、大学が梅田先生を守っている。というよりは……」

「大学は何もしていない」

「……ということか。ただそれが結果的に『学問の独立』や『研究の自由』に貢献している点は興味深い」

「そうそう。ただね、研究テーマは自由だけど、うちの大学には世の中の流れに抗することで独自性を発揮しようとする暗黙の方針のようなものが感じられる。ここ数年、他の大学では短期間に成果を出せる小さな研究が大流行してるけど、うちは五年から十年スパンの研究じゃないと本物として認めてもらえない雰囲気がある」

「でも金はないぞと」

「そうそう、あっはっは」

「結局、仙人みたいな人しか残らないんじゃないの？」

「そうだな。過去の例を見ても、金や名誉にこだわる教員はすぐ辞めちゃう。研究と教育のことしか頭になくて、あとは生存できれば良い、というくらいの浮き世離れした教員しか残れない。まったく実験物理大学はフィルターだよ、変人の」

◎松本雅彦（生物学科・教授）と 森健太郎（生物学科・特別研究員）

実験物理学に通い始めてから三ヶ月が経過した。初めて実験物理学を訪れた頃は「BBも彼岸もオカルト思想の産物であり、自然科学の敵だ。いつか完全に論破してやる」といきり立っていたのだが、最近「肯定するにしても否定するにしても、まずは多数の実験事実を記録することが大切だ」と考えるようになってきた。背後にあるメカニズムが全く想像つかないからと言って、これらの奇妙な現象を「見なかったことにする」という態度もまた自然科学の敵である、ということろまで「後退」してしまつた僕はサイエンライター失格だろうか。

彼岸は想像を絶する広大な世界だ。電磁波と音波の組み合わせを変えることで自意識は様々な場所に移動する。自宅や近所のような場所にいることもあれば、外国のような場所にいることもあるし、宇宙空間のような場所にいることも、何とも形容のし難い場所にいることもある。ここで「現実世界に似た場所」に「ような」と付け加えたのは、彼岸から現実世界を

見ている、と明確に証明できるケースが少ないという理由もあるが、それ以前の問題として、これらの場所がいわゆる「パラレル・ワールド」のように現実世界と若干ズレているように感じられることが多いためだ。例えば、僕の自宅の書齋にそっくりだがなぜか机の形状だけが異なって見えるとか、外国の古い街並で伝統的な様式を守っているはずの建築物がなぜか物理法則を無視して高層ビル並みの高さに見えるとか……。

これらの事例から考察すると、彼岸は大きく二種類に分類できるのではないかと思う。つまり、前者のように「ありのままの現実世界かそれに近いリアルな景色が見える彼岸A」現実的彼岸」と、後者のように「全くの非現実世界かそれに近いファンタジーの景色が見える彼岸B」超現実的彼岸」である。後者の例として上に挙げた外国の街並の場合、どう考えても現実世界を写したものには見えないので、僕は誰かが想像で創造した「意識の作り上げた世界」を見ていたことになる。とすると、これは恐るべき情報量だ。松本教授が作ったトグル・スイッチの比ではない。一つの街を丸ごと「設計」し「施工」していることになるからだ。だとしたら、一体

誰が何のために？

実は最近、気になることがある。BBを使った実験を繰り返すとBBを使わなくても軽い変性意識状態に入ることがある、ということとは松本教授からあらかじめ聞かされていたので、それはまあ構わない（今のところは）のだが、これまでBB内では経験したことのない奇妙な感覚をBB外で体験するようになったのだ。具体的には、誰かに見られているような感覚であつたり、誰かが話しかけてくるような感覚であつたり、誰かに脳を引っ張られているような感覚であつたりする。耳鳴りも増えたように思うが、健康状態とは関係なく聞こえて来るので、これが松本教授の言う「彼岸からの重要なメッセージ」なのかもしれない。とりあえず耳鳴りが発生した時刻を記録に残しておくことにしよう。後で僕に降りかかる出来事や僕が下した判断などとの関連性が見えてくるかもしれない。

さて、これらの中で特に気になるのが「誰かが話しかけてくるような感覚」である。初めの頃は、自分の脳内の想像の産物だと思っていた。しかし、その内容がチープな割には「訴え方」が切実なようで、僕が行動に移

さないではいられないような心理状態になるので困った。もちろん、「これらすべてを引くくめて脳内現象である」とする見方が従来の科学観であり、それを否定するものではないが、その「脳内現象」のメカニズムも解明されていない以上、安易に肯定することもできないのではないか（それが真に科学的な立場だと思う）。「なぜか理由は分からないが、そのように行動してしまう」ということは実生活においても時々経験するが、本来の意味において僕らが何者からも独立した《自由意志》を持ち、自分の人生を選択できているのか心配になるのもこんな時である。

話しかけてくるのは決まって中年の女性で、僕の知らない人だ。「訴え」の目的や意味するところは僕には分からないが、日本語としては一応理解できる。いつも同じように、次のフレーズが脳内に響く。

「マツモト。ジツカノダンス」

奇をてらわず自然に漢字変換すれば、

「松本。実家の箆筒」

であろう。「松本」とは地名だろうか人名だろうか。「実家」と言うから

には「嫁ぎ先」か何かがあり、そこではないと言っているようだ。「箆筒」がどうしたのだろう。箆筒自体に注目して欲しいのか、箆筒の中身に注目して欲しいのか。

中年の女性がもし僕へ向けて語っているのだとしたら、地名の松本には特に心当たりはない。もし松本市にある「実家の箆筒」に何かがあるとしても、それこそ無数に存在するので、たったこれだけの情報からでは事実上調査することは不可能だ。では人名だと仮定して考察を続けよう。僕が知っている松本さんは大勢いるが、現在のところ真っ先に思いつくのは松本雅彦教授のことだ。実際、「マツモト。ジツカノタンス」というフレーズが脳内に響くたび、「マツモト」の部分で「松本雅彦教授」のイメージが脳裏に浮かぶ（あまり見たくはないが……）。僕にとっての第二・第三の松本さんを絞り込むことも可能だが、とりあえず松本教授に「実家の箆筒」という言葉をぶつけてみて、松本教授がどのように反応するか「実験」してみることにした。

ある日、実験物理学の松本研究室にて、

「松本先生、『実家の箆笥』という言葉に、お心当たりはございませんか？」
と、何の前置きもなく、ズバリと切り込んでみる。反応はなくて当然だ
と思うが、

「……B Bの中で聞いたのかね」

「いいえ、B Bの外です。正確には『松本。実家の箆笥』という言葉が脳
内に響きました」

「声の主は？」

「女性です。中年の」

「……そうか、仕方がない」

え？ 「仕方がない」って、どういう意味だ？

「……森さん。私も覚悟を決めたよ。『実家の箆笥』の件については、聞こ
えた日時や状況を記録に残しておいてくれるとありがたい」

さっぱり意味が分からない。次に掛ける言葉を考えあぐねているうちに、
松本教授は研究室を足早に出て行ってしまった。

数日後、珍しく松本教授から電話が掛かってきた。

「森さん、ありがとう。たしかに実家の箆笥にあったよ。人は死ぬと意識だけ本当に『彼岸』へ行くのかもしれないな。脳が無くても意識を持ち続けるのかもしれない。これで竹原先生の仮説の傍証がまた一つ増えた。：残念だが、私の仮説は立場が弱くなったよ」

相変わらず話が飛躍しすぎていて全然理解できない。より詳しく話を聞いてみると、どうやら以下のような経緯があったようだ。

半年前に松本教授の奥さんが突然の事故で亡くなった。一ヶ月ほどは葬儀や各種の事務手続きなどで大変だったが、ある銀行の預金通帳だけがどうしても見つからない。その後、国内外の出張が続いたこともあり、しばらくこの問題は放置していた。そんなある日、松本教授自らが被験者となってB Bを用いた実験をしていると、ある電磁波と音波の組み合わせのときに、中年女性の声で何度も「実家の箆笥」という声が聞こえてきた。話し方の癖やイントネーションから、声の主はすぐに分かった。妻の絃子である。しかし、絃子はもう死んでいる。これは自分の脳が作り出した幻聴

に違いない。それがB Bを使うことで誘発されたのだ、と考えた。そして、この電磁波と音波の組み合わせは、本研究の目的である彼岸の探索には使えないので「封印」することにした。

当時は「実家の筆筒」の意味するところを理解できなかったが、ふとした瞬間に閃いた。「見つからない預金通帳」と「実家の筆筒」とが結びついたのだ。だが、そんな都合の良い話があるわけないし、万が一、預金通帳が妻の実家の筆筒で見つかりでもしたら、死んだはずの妻が教えてくれたことにならないか。そんなことは断じて認めるわけにはいかない。もちろん妻が生前に語っていたことを松本教授が忘れていたか、積極的に聞いてはいなかったものの無意識のうちに記憶に留めていた、という可能性はある。それが現代の自然科学の常識的な解釈であろう。しかし預金通帳が出てきた場合、それでも腑に落ちない点が残る。ならばなぜ、B Bを使ったときにだけ、都合良く「正回答」が降ってくるのか。その合理的な説明が必要だ。

松本教授は「実家の筆筒」を調べる必要はない、と心に決めていた。し

かし、変性意識状態のときに「同じ声」を聞いたという他者（＝僕）が現れ、ついに観念し、現在に至るというわけだ。

「これまで竹原先生の集めた似たような事例を小馬鹿にしてきたけど、いざ自分の身に起こってみると、これは信じちやうね。奇跡的な経験をして新興宗教にはまってしまう人々の気持ちがかかるような気がする。科学者としてはあるまじき姿勢なのかもしれないが……。ここでオツカムの剃刀を持ち出すと怒られるかもしれないけど、シンプルな説明を選択すると『亡き妻が教えてくれた』というのが実感としても一番しっくりくる」

ここで僕は、ある可能性に気が付いた。

「松本先生が奥さんの声を聞いたときの電磁波と音波の組み合わせをBBで再現すれば、預金通帳が見つかった今は『実家の筆筒』以外の声が聞こえるかもしれないよ。もしかしたら、会話を交わすことだって可能かもしれない。『封印』を解いてみてはいかがですか？」

「……………」

しばらく無言のまま三十秒ほど経過した。そのうち電話口で鼻水をすす

る音が聞こえ、そのまま松本教授の電話は切れた。

この日の夜、鮮明な夢を見た。あの声の主である中年の女性が和服姿で現れたのだ。顔は良く見えないが、声は明瞭に聞こえた。

「ありがとうございます。あの人は私に対して心を閉ざしてしまったのかと思っていました。あなたはB B無しでも私の声が聞こえるのですね。この能力は近い将来きつと役に立つでしょう。もつと大きな問題が……」

「ああ、ちよつと待つて下さい」

と、こちらから声を掛け終わる前にその中年の女性は消えてしまった。あまりにも印象的な体験だったので深夜なのに目が覚めてしまった。しかも妙に頭が冴えている。もったいないので、ベッドサイドの電灯を点け、体を起こし、しばらくメモを取りつつ思索に耽ることにした（何かに気付いきそうなのだ！）。

これが彼岸との通信だったのか、それとも僕の願望が生み出した単なる夢だったのか、それは分からない。現時点では玉石どちらに転ぶか分から

ない情報だが、これが一個人の中で閉じている「夢」ではなく、多くの人間で共有している「彼岸」との通信であれば、第三者による目撃証言などで「まぎれもない事実である」と証明できる可能性がある。実はこの新しい証明可能性は哲学の革命に直結しているのではないか。認識論は証明可能性と共に歩んできた。彼岸は此岸と同様に理論を実践で検証できる共有世界である。事実とは何か。実在とは何か。その枠組みが今、変わろうとしている。情報を伝達し共有することの真の意味。物的情報共有の場としての此岸と、心的情報共有の場としての彼岸……。

やはり、一人にしか見えないものや、一人にしか聞こえないものは、自然科学の対象にはならないと思う。従来の科学では、個人の脳で起きている現象を外部から観察すれば科学になるが、内部から体験すると科学にはならなかった。むしろ客観だろうが主観だろうが、僕たちの人生には《事実》や《実在》している物事こそが重要だ。しかし一方で、多くの人間に共有されない個人的な思い込みが、例えば絶対的権力を通して社会に強制されることの危険性を、これまで人類はイヤというほど学習してきた。科

学は、その反省の上に作られた安全装置の一つであり、人類の知恵の結晶である。

結局のところ、キーワードは「共有」だ。BBを手に入れた人類の次世代の唯物論つまり次世代の科学の方法論は、物質世界・精神世界を問わず《共有できる事実》《共有できる実在》を基礎として認識・判断・発展していくことになるのではないか。なぜなら、人間は社会的な動物であり、それぞれに意識があることを相互に認めることで社会が成立しているのだから。

あの日以来、松本教授が微妙に変わった。悪舌・毒舌は健在だが、少し丸くなったというか、余裕が感じられるようになってきた。もちろん、たった一回の奇跡だけで科学を捨ててオカルトへ走るはずもなく、現在も彼岸の実在を科学的に証明するために、研究室の責任者として日夜、奮闘している。

あれから松本教授が実際に「封印」を解いて例の電磁波と音波の組み合わせ

わせで彼岸へのアクセスを試みたのかどうかは分からない。なんだか訊いてはいけないことのような気がして、この話題には意識的に触れないようにしていたのだ。ただ、松本教授が何かの折に、

「仏壇の家の写真が変わらないのに、なぜか日によって表情が違って見えるんだよ。笑っていたり、怒っていたり。何だかこちらの心を見透かしているみたいだ」

と、つぶやいたことがあった。写真表面の物質の分子構成は変わっていないのに、そこから受ける印象が変わるということは、観察する側が変わっているということだ。言うまでもなく、これは写真を見るときだけの現象ではない。僕たちの五感、つまりあらゆる感覚は自分たちが信じているほど正確で安定しているわけではないのだ。この現象が純粹に脳内の神経細胞＝ニューロンの電気生理学的な不安定さに還元できるものなのか、それとも全く別の要因が働いているのか。SFじみた話になるが、もしもこうしたレベルの知覚においても彼岸の影響を受けているとしたら、志向性（意識が何に注意を向けているか）が《彼岸にいる存在》から操作されている可能

性も否定できなくなる。人生は志向性による選択の連続だ。これまでの人生で無数の「気付き」を「与えられた」ことで、現在の自分が形作られているとしたら……、と考えただけでもクラクラしてこないだろうか。

少し妄想が過ぎたかもしれない。松本教授が何かに気付いたわけではなく、いつもの気まぐれ発言と思えば、どうということはない発言内容だ。

ちなみに、「実家の筆筒」の件がゼミで話題に上ることはなかった。結果的に、僕と松本教授だけが知ってる秘密となっている。……そうそう、松本教授の奥さんも知っているかもしれないけどね。

第三部 科学社会学実験

ある朝、いつものように実験物理学へ行くと、校門を入ったところにパトカーが五、六台停まっていた。

(一体、何があったんだ?)

校庭に警官や大学関係者が集まっているので、そちらへ向かって歩いていく。校舎に面した側の校庭の一部にロープが張られ、立入禁止になっていた。見上げると、木造校舎の二階中央部に大きな穴が空いている。ちょうど松本研究室の辺りだ。

「うわっ、これは酷い」

穴の直径は三メートル近くだろうか。研究室の中が滅茶苦茶に荒らされているのが見える。見慣れた什器や機材が目飛び込んで来た。「やっぱり、松本研だ」

建築業者や解体業者が使うような大型の機械で無理やり校舎の土手っ腹に穴を空けたのか、穴の周囲の茶色の壁面に強い力が加えられた跡が残っ

ている。木壁が割られた部分が白く剥き出しになって見えた。木材の割られた方向から考えて、内側からではなく外側から力を加えて壁を破壊したものと思われる。もちろん今は、校庭に建機の類は見当たらない。これは事故ではなく事件だ、と直感した。

「森さん？」

若い女性の声に振り返ると、竹原研四年の江崎さんが立っていた。

「松本研の人たちは？　BBは大丈夫だったのかな？」

と訊くと、

「BBが無くなっていくそうです。あと、松本先生とは連絡が取れません」と早口で答えた。

「石川くんは？」

「今、こちらへ向かっています」

「竹原先生は？」

「米国に出張中です」

そうか、それはマズいことになるかもしれない、と反射的に思った。

どこから嗅ぎつけてきたのか、新聞社やテレビ局の取材車が続々と大学構内に入ってきた。いずれ「記者」たちによる無責任な「取材」や「インタビュー」が始まるのだろう。こういう時は、当事者や近い立場の人間ほど不用意な発言は控えた方がよい。江崎さんに「マスコミには気を付けて。失礼な連中も多いから」と伝え、その場を離れた。

今日は他の予定も無かったので、文字通り「身ひとつ」の軽装備で来てしまったことを後悔した。カメラもマイクもノートパソコンも持っていない。やはり一旦、自宅へ戻り出直した方がよいと考え、校門へ向かって数十メートルほど歩いたところで背後から声を掛けられた。

「大学の方ですね。今回の事故について、どう思われますか？」

テレビ局の取材クルード。すでに先発隊が到着していたとは気付かなかった。不意を衝かれた形になった。スーツ姿の二十代後半の男性が僕にマイクを向ける。強力なライトとテレビ局のカメラも僕の顔に向けられた。それにしても、のっけから「事故」と決めつけた取材はいただけない。「あれは事故ではなくて事件ではないでしょうか。木の割れ方を見ると、

内部からではなく外部から力を加えて穴を空けたことが分かります。しかもかなり強力な……」

まだ僕の話は終わっていないのに、途中で遮られた。

「松本研究室では、オカルト的な怪しい研究が行われていたというのですが、担当教授が実験装置ごと消えてしまったというのは、ある意味、実験が『成功』したとも言えるのではないのでしょうか」そして小さい声で「時空を越えたとか」と付け加えた。

（何を言っているんだこの男は。君の頭の方がよっぽどオカルトに毒されているよ。だいたい本当に時空を越えているとしたら壁に穴が空くはずがないじゃないか、と思つたが）

「松本研の実験装置には、物理的な破壊をもたらすほどのパワーはありませんよ。論文を読めば分かるはずですよ」と答えておいた。

「でも、その松本教授は、かなりの変人で、問題のある教員だった、と」
「松本先生は、ちよっとおかしなところがあるけど、研究熱心で、良い先

生ですよ」

「……なんだか、お詳しいですねえ」

その男はニヤリと笑った。しまった。ついカツとなって、余計なことまで喋ってしまったかもしれない。

「急いでいるので、失礼！」

と、その場で回れ右をして、急ぎ足で校門へと歩き出した。背後から幾人かの笑い声が聞こえてきた気がした。

約一時間半かけて自宅に到着した。久しぶりに最寄り駅から走ったので、息が切れてしまった。まずテレビをつけてみる。まだ午前中なので報道系の番組は数が少なく時間も短い。十一時十分前の公共放送のニュースでは政治家と官僚の汚職、大企業の不祥事、殺人事件に次いで四番目の扱いであった。警察は、事故と事件の両面で捜査を進めているとのことだ。

十一時ちよほどの民放のワイドショーでは何とトップの扱いになっている！ヘリコプターで実験物理大学の校舎を空撮するオープニングから始

まったので正直、驚いてしまった。「生中継」だそうだ。ヘリを飛ばすほどの事件ではあるまいに、必要以上に大きな事件にしようという意図が感じられて不快だ。現在は、校舎の穴の部分には青いビニールシートが掛けられていて、中が見れなくなっている。現地からのレポートは一応、ニュース番組風にまとめてはいたが、「事件」ではなく「事故」であることを暗示するような言い方が気になった。

あとは、お決まりのサスペンス風BGMに乗せて、「事故」の背景が語られる。曰く、脳科学の中でも異端の研究分野である。曰く、人間の意識を制御する危険な装置を開発していた。曰く、タイムマシンの実験かもしれない。曰く、松本教授はオカルトに理解を示すエセ科学者の疑いがある：：聞くに耐えない。そして、例の「頑固で気難しく、学生にも恐れられている冷徹な鬼教師」の話を持ち出してきた。もちろん「出典」は明かさない。結果的に、根拠のない人格攻撃になってしまっている。

「お前ら、ネットで検索しただけだろう。ちゃんと取材しろ！」
 思わずテレビに向かって叫んでいた。すると、その声に呼応するかのよ

うに、司会者が「では、松本教授を良く知る関係者からのコメントです」と紹介して短いビデオが流れた。

「……おかしなところがあるけど、研究熱心で……」

これは僕か？ ご丁寧にも画面の下に「(松本教授は) おかしなところがある 研究熱心」とテロップまで付いている。なぜここだけ切り取って流すのか。一番どうでも良い部分だけを編集して使ったな。

スタジオのコメンテーターたちは実験物理大学への批判を始めた。

「やはり、このような危険な研究を野放しにしてきた大学の責任も問われるのは当然でしょう」

「頭のおかしい人間が、研究熱心なのが、一番困るんだよ」

「大学の教員も免許制にして、定期的に更新させれば、ダメ教員は減らせますよ」

ちなみに最後の発言は、有名大学の教授の発言である。そもそも、まだ何も明らかになっていないのに、よくここまで持論を「展開」できるものだ。

ここでCMに入った。次のコーナーは全く別の話題に変わっていた。

それにしても酷い。酷すぎる。僕は我慢できなくなり、テレビ局に電話で必死に抗議した。しかし、電話口の妙に場慣れした係の男性の言葉を借りれば「貴重なご意見としては承ります」が、具体的な行動に出るつもりはないらしい。民放テレビ局が恐れているのは番組のスポンサーだけであって、一視聴者の訴えなど「無視」する以外に使い道はないのだろう。

疲れた。僕はそのままベッドに倒れ込んだ。どうしたら良いのだろう、竹原先生ならどうするだろう、などと考えながら意識が遠くなっていくのを感じた。

目が覚めたのは夕方になってからだ。随分と長い間、悪夢を見ていたような気がする。寝惚けた頭で、今朝の一件も夢だったら良いのに……、と思いつつ、テレビをつけてみる。午後5時台のニュースでも、大きく取り上げられていた。特に新しい情報は無いようだが、それ故に松本教授の行方が本格的に心配になってきた。しかし、マスコミにとっては謎が謎を呼

ぶ格好の素材なのだろう。視聴率を稼ぐための興味本位の演出は相変わらずだ。松本教授の研究に対する真面目な批判もあったが、肯定的なものは一切出てこない。脳科学者や心理学者たちは自らに火の粉が降りかからないように、松本教授の研究との違いを強調し、自分の研究を守ることには始していて、何ともスケールが小さいと思った（もつとも、そういう番組に都合の良い発言をする学者ばかりを集めているのだろうが……）。

冷静になって考えてみると、事件が発生してから現在まで、テレビ局の対応が迅速なことに驚く。今朝、事件が発覚してから、まだ半日しか経っていないのに、ここまで「世論」を誘導するための仕組みを構築するとは、まるであらかじめ準備していたかのように見事な仕事っぷりである。

インターネットの様子も確認しておこう。すでに、ブログやSNSなどで多くの人々が反応している。が、ここでも意外にテレビの影響の大きさが感じられた。人間というものは、それまで全く無知だった分野については、いとも簡単に「洗脳」されてしまうということが良く分かる。一方、さすがに科学者や技術者が執筆しているものは比較的冷静に事件を捉えて

いるように思われた。中立的な立場から松本教授や竹原准教授の研究を分かり易く紹介する良心的な学者もいて、本来ならば僕がやらねばならない仕事を代行してもらっているように申し訳なく思った。あと、松本教授らの全面的な応援団を形成しているのが、スピリチュアルや精神世界の愛好家たちだ（これは予想通り）。中には、変性意識状態について詳細なレポートを書いているマニアもいて、実験物理学と同様の研究が数ヶ国で行われていることを紹介していたので僕も勉強させてもらった。

ネット上では、政治的立場で言うところの右派からも左派からも、松本教授の研究に対する否定的なコメントが寄せられているのが興味深い。右派は、人智を越えた存在を認めることは評価するものの、既存の宗教を否定するような動きには警戒心を露わにし、松本教授らを「精神の侵略者」とまで称していた。左派は、松本教授らを「新手の観念論者」と称し、物質こそが意識を生み出すという従来の唯物論の立場に固執していた。やはり、これまで構築されてきた巨大な科学の枠組みが壊されることを恐れているのだろう。

ついでに巨大掲示板も覗いてみる。幾つかのスレッド（特定の話題について語る場）が立てられ、盛り上がりを見せていた。感情的なものや単なる揚げ足取りの類は無視するとして、時々面白い書き込みが見つかる。

「たぶん政府か軍が動いたな。マスゴミの情報操作は明らか。松本の研究は本物確定」

「松本と竹原は時々ネタを仕掛けるから、これも自作自演じゃね？」

なるほど荒唐無稽だが、可能性としては一応どちらもあり得る話だ。しかし、以下のような書き込みは全く頂けない。

「松本雅彦教授失踪w。研究に失敗して夜逃げですか」（「w」とは「笑」の意）

「実験物理大学って何？ 初めて聞いたヨ。無名大学の売名行為に一票」
さらに幾つか読み進んでいくうちに、とんでもないものを見つけってしまった。おそらく昼のワイドショー以来、繰り返し放映された僕の《ビデオコメント》に同期して更新されていたスレッドだ。以下、一連の書き込みを抜き出してみる。

「『(松本教授は) おかしなところがある 研究熱心』だつてさ」

「コイツ知ってる。自称サイエンスライターのモリケンだ」

「モリケン、実物大の松本を仕事で取材してんじゃんw」

「恩を仇で返すwww」

「げ、うちの教授もモリケンの取材受けてたよ」

「二流のライターは二流の教授を取材するからな」

「松本研究室に入りたくて実物大を受験しようと思っていたのに……。シヨック」

「早めに分かって良かったね」

「松本研に入るのに丁度良い穴が空きました。これがホントの裏口入学」

「座布団一枚」

「ツマンネ」

「モリケンの個人情報まだですか」

「ほらよ。氏名||森健太郎(もりけんたろう)、住所||……、電話番号||……」

僕の自宅の住所も電話番号も正確に記載されていた。たしかに僕はフリ
ーと言っても事務所を構えているわけではないので、名刺に書かれた連絡
先はすべて自宅のものである。しかも、取材先とは必ず名刺を交換するの
で、どこから漏れた情報かを特定することは困難だ。ネット上の匿名揭示
板では、不特定多数の人間が書き込みを行うことによる利点もあるが、今
回のように個人攻撃のために悪用された場合には凶器となる。早速、削除
依頼を送信したが、どこまで対応してもらえるものか心配である。

良くも悪くも、テレビは薄く、ネットは濃い。少なくとも玉石混淆の幅
がテレビよりもネットの方がはるかに広いということは再確認できた。

その日の深夜、ベッドに横になって天井を見つめていると、急に耳鳴り
がして、脳が引っ張られる感じがした。「実家の箆筒」の件以来の懐かしい
感覚だ。脳の一部が変性意識状態へ移行するような予感がしたので、その
まま目を閉じてリラクセスしてみる。すると程なく脳裏に映像がぼんやり
と浮かんできた。例の和服姿の女性だ。今回は夢中ではない。意識がは

つきりしたまま彼岸の様子を見ている。やはり彼女は彼岸の存在だったのか。

「きこえますか」

という穏やかな声が聞こえてきた。

「はい」

と返答してみる。すると、

「ああ、よかった。じゃあ、かわります」

え？ 「かわる」って、どういう意味だ？と考えているうちに、和服姿の女性の左隣に誰かがもう一人佇んでいる気配を感じた。そして今度は男性の声で、

「森さん、分かるかね？」

その存在感で一瞬にして把握できた。松本教授だ。

「松本先生ですね、今どこです？」

「彼岸だ」

「それは分かっていますよ。隣にいるのは奥さんでしょう……あれ？とい

うことは、もしかして松本先生も死んでしまったのですか？」

「ご期待に添えなくて申し訳ないが、まだ死んではおらんよ。肉体は此岸で生きておる」

「では、その肉体はどちらに？」

「うーん、拉致されたので、ここがどこか分からない」

松本教授の説明を時間順に並べてみると、以下のようになる。

実験物理学の研究室で徹夜仕事をしていたら、突然、何者かに強烈な薬品を嗅がされて意識を失った。気付いた時には、BB一台と共に、白い壁の研究室に閉じ込められていた。新築のにおいがするので、建てたばかりのようだ。広さは大学の研究室の半分くらいだが、窓が無いので地下室かもしれない。ここでBBを使った研究を継続するように指示されている。隣には自由に入出りできる居住用の個室があり、ここにはベッドも水道もトイレもシャワーもある。長期にわたり拘束するつもりらしい。食事は質素だが定期的に与えられている。当然ながら外部との通信手段は無い。パソコンはあるがインターネットには接続されていないし、携帯電話も取り

上げられた。

犯人グループの総数は不明だが、常に全員が目の部分だけ開いている覆面をして、決して素顔を見せることはなく、声もボイスチェンジャーで変えているという徹底ぶりである。うち少なくとも三〜四名は研究者らしい。彼らとビデオカメラ経由で幾つか会話を交わしたが、BBについて書かれた論文をかなり深く読み込んでいることは分かった。非常に優秀な頭脳を確保していることは間違いない。なお、今回の拉致の目的について尋ねても、堅く口を閉ざしてしまうので真意は不明だが、どうやら「BBが歴史的事実の検証に使えるか否か」を非常に気にしているらしいことは分かった。BBを使って、意識だけ任意の時代・場所へ行き、彼岸から此岸を観察するのである。例の「意識だけのタイムマシン」構想だが、制御が非常に難しく、まだ取り組むべき段階ではないと松本教授は彼らに伝えた。にもかかわらず、もう一台のBB（別の部屋にある）を使って早期に実験を開始するので協力するようにと命令された。それまでは松本研のマニユアルに従って、BBの基本的な操作を覚えたいのだという。

幸いなことに松本教授は、しばらくの間、自分用のBBを自由に使えることになっている。どうも犯人グループは、BBが無いと彼岸へ行けないと思っっているらしい。もちろん一般論としてそれは正しいし、実際、論文にもそのように書いてきた。だが、例外として、青池素子や森健太郎のように、BB無しでも彼岸と通信できる人間がいることを彼らは知らない。こうして現在も外部とコミュニケーションしているとは夢にも思っていないだろう。

「しかし……」

僕は、素直な気持ちを打ち明けた。

「……しかし、僕は疑問を持っています。この会話は本物でしょうか。僕個人の中で完結した、単なる脳内現象ではないでしょうか？」

「君も疑り深いねえ」

「でも、この会話が本物か偽物かを判別できない限りは、此岸で具体的な行動に移るのは躊躇われます。事実と異なる情報を元に行動しても、松本先生を救出するつもりが、かえって事態を悪化させてしまうことにもなり

かねません」

「……なるほどねえ。まさに科学の問題だ。この通信が客観的事実であることの証明は難しいが、主観的ではあっても少なくとも事実であることを確認してから、次のステップへ進んで行くべきである、と。……がっはっは、了解、了解。では、科学的に行きましょう」

「でも、どうやって確認すれば良いのか分かりません。松本先生とは今、此岸ではつながっていないし、そもそもどこに居るのかさえ分かりません」

「それは簡単だよ。この通信を第三者が観察していれば良い」

「ですから、BBは二台とも盗まれてしまったんですってば！」

「BB無しでも彼岸に来れる人がいるだろう。君よりも上手に」

「ああ。……青池さん」

「そう。彼女にここへ来てもらって、青池さんと森さんの意見が合致しているかどうかを、電話なりネットなりで確認しながら先へ進めばいいじゃないか」

「そうか、その手があった。」

「でも、青池さんにこの場所を、彼岸の中のどこなのかを正確に伝えることは僕にはできません」

「それは初めから君に期待してないよ。だいたい君は、私が昼間からずーっと呼びかけているのに、全然気付いてくれなかったじゃないか」

「……だから昼寝してた時、悪夢にうなされていたんだ……」

「それで仕方なく、家内に呼びかけを手伝ってもらった。というか、見るに見かねて家内が私の手助けをしてくれたわけだが……」

「では、青池さんも同じように、奥様が呼びかけをして、ここまで連れてくる、ということですね」

「いや、たぶん、その必要は無いだろう。青池さんの実力なら、彼岸に入りさえすれば、私を目印にピンポイントで移動してくるはずだ」

「すごい！」

「じゃあ、まずは森さんが青池さんに電話を掛けるところから。電話番号は、石川くんが知ってるよ」

石川くんか……。苦手なんだよな、彼。でも、そんなことは言ってもら

ない。

「分かりました。では一旦、ここを離れます。戻って来る時には、また奥様にナビゲートをお願いします」

目を開け、上半身を起こし、ベッドに腰掛けたまま、携帯電話を手に取った。と、その時、携帯電話の着信音が大きく鳴り響いたので、驚きのあまり床に落としそうになってしまった。発信者は未登録の番号なので、警戒しつつ受話ボタンを押す。

「はい」

「森さんですか？ 青池です」

なぜ、向こうから掛かってくるのか、全く理解できない。また僕の頭がひどく混乱してしまった。青池さんが登場する時はいつもこうだ。何かが起きる。何かしら驚かされる。

「こんばんは。今、こちらから連絡を取ろうと思っていたところなんですよ」

つとめて平静を装うが、やはり声が震えてしまう。

「ああ、やっぱり…」

「やっぱり？」

「はい、やっぱり、です。占いに導かれて、ここまでやってきましたから」

「占い、ですか」

「あまり先のことまでは読めないのですが、とりあえず、森さんに電話をするので、道が拓けると」

占いって、全く根拠のない迷信のようなものではなかったのか。なんだか彼岸の状況に裏打ちされているようで、ちよつと気味が悪いな。

「……それで、失礼とは思いつつも、石川さんに、森さんの携帯の番号を、教えてもらいました」

そうか。青池さんの頼みなら、石川くんも素直に聞いてくれるだろう。因果関係は不明だが、ナイスだ、青池さんの占い。

「松本先生が行方不明になっているのは御存知ですよね」

「はい。テレビで見ました。占いでは、囚われの身になっている、と出ましたが……」

おお、当たっている。が、今後の情報の確度を高めるため、ここで変な先入観を持たせないように、気を付けなければ。

「松本先生がB Bを使つて、彼岸からの通信を試みているかもしれません」

「B Bを使える状況なのですか？」

「あ、いや、その……可能性がある以上、僕たちにできることを、進めておくべきではないかなと。今は全く手掛かりが無いわけですから」

「そうですね」

「青池さんはB B無しでも彼岸へ自由に出入りできると聞いていますが、僕も彼岸からの手助けがあればB B無しで何とか彼岸へ行くことができませす。二人の情報が合致したことを電話で確認しつつ、確実な情報を集めたいのですが……」

「わかりました。でも、二人で行動を共にするのは、難しいですよ」

「はい。なるべく足手まといにならないように気を付けます。もし、ついでに行けなくなったら、僕は記録係に徹します」

「ところで、なぜ、このようなアイデアを、思いついたのですか？」

「実は先程、BB無しで彼岸へ行ったらしくて、松本先生らしい人と会話したらしいのですが、自分一人では自信が持てなくて……」

「なるほど。では、まず彼岸で松本先生を探しましょう。電話はそのままです。じゃあ、行きますよ」

えっ、もう行くの？ 僕は慌ててベッドに横になり、目を閉じて、気持ちを落ち着けて、耳鳴りがするのを待った。が、一向に変性意識状態に移行する兆しが現れない。気持ちの焦りが彼岸への移動を妨げ、さらに焦りが増大してしまうという悪循環だ。そうこうするうちに、電話口から青池さんの声が聞こえてきた。

「あ、いらっしやいました、松本先生。隣にいるのは……奥様ですか。初めまして、青池と申します。さっきまで森さんがこちらに……。ええ、森さんから、確実な情報を集めたいからと。でも、肝心の森さんがまだ……」

やはり僕の能力ではダメなのか。「足手まとい」というレベルにすら達していない。瞼を閉じたまま、自分の情けなさに涙が溢れてきた。大粒の涙が一つ、また一つと零れ落ちて枕を濡らした。

突然、ベッドに横になって自分のすぐ上の空間に、白い後光に包まれた「天使」が現れた。いや、「天使」という表現が正しいかどうかは分からないが、何かしら清くて暖かい「存在」である。白い光が眩しくて良く見えないが、どうやら「二人」いるようだ。こちらに手を差し伸べている。僕は無意識に両腕を伸ばす。物理的に伸ばしたのか、精神的に伸ばしたのか、特に意識しなかった。すると、「天使」は僕の手を取って、上へ上へと引きあげてくれた。ズルッと肉体から精神が抜け出した感じがして、視点が宙に浮かび上がる。下を見ると僕の肉体がベッドの上に横たわっていた。これが体外離脱か！

「天使」たちは僕を両脇から抱えて、もう一方の手で上空を指差す。「天上の光を目指して進みなさい」という言葉が心に直接響く。日本語でも英語でもない。生まれる前から知っていた言語。これまでに何度も聞いてきた言葉。普段は忘れていただけなのだ。

自宅アパートの天井を抜け、夜の空に飛び出した。星々の中にひときわ大きく強く輝く「星」が見える。「星」というよりも「そこから光が漏れて

いる穴」と表現した方が近い。普段こんな天体は存在しないので、いま僕の心にだけ見えているのだろう。そこへ向かって鳥のように飛ぶ。それにしても、この浮遊感は凄い。ジェットコースターで上下するよりも派手に風や重力の変化を感じる。はじめは酔いそうだったが、少し慣れてきたところで急に浮遊感が消え、星空が見えなくなつた。暗黒の空間に漂つているようだ。ここが目的地なのか？

「待ちくたびれたぞ、森さん！」

その声^{トリッガ}が引き金となり、周囲を知覚できるようになった。目の前にいるのは松本教授だ。やった、やっと着いた。しかも、いつもより映像も音もクリアだ。「天使」さんのルートを使うと、より深く彼岸とシンクロできるのかもしれない。その分、肉体の感覚は弱まっている気もするが……。おや、そう言えば、「天使」たちがいない。代わりに、少し離れたところに、青池さんと松本教授の奥さんが立っていた。

「お二人が、私をここまで連れてきて下さったのですね。ありがとうございます
います」

と言うと、二人とも顔を見合わせて、きよとんとしている。

「いいえ。私たちは、ずっとここにいましたよ」

あれ？ そうなのか……。でも、まあ良かった。さあ、この事実を電話で青池さんに確認しなければならぬ。ゆつくりと瞼を開けようとするが、眼球からの視覚情報が大量に脳へ流れ込むためか、彼岸とのつながりが切れてしまいそうになり、焦る。朝、目覚めたとき、直前まで見ていた夢を忘れてしまう、あの感覚に近い。ここで無理をして目を開けてしまうと、もう二度とここに帰って来れなくなりそうだ。仕方なく、目を閉じたまま手探りで枕元の携帯電話を探してみるが……。無くなっている！ 何という失態だ！ つくづく自分が情けない。

「青池さん。僕、此岸の携帯電話を無くしてしまいました。せつかくここまで来ていただいたのに、ごめんなさい」

「わかりました。でも、もう大丈夫でしょう。わたくしも確認できましたし……。ここで見聞きしたことを、あとで『答え合わせ』すれば、それで充分でしょう」

松本教授、奥さん、青池さん、森の四人が彼岸に集まった。さて、これから、どうしよう。

「まず、松本先生のBBを探しに行きませんか」

青池さんが提案した。言うまでもなく、身柄を拘束されている松本教授の安全を確保することが最優先だ。少しでも早くBBの設置場所を突き止めておくことに異論はない。

「でも、どうやって探すのですか？」

僕は素直な疑問をぶつけてみた。

「これから主人が此岸へ戻るのに付いていけば、いずれBBに辿り着くでしょう」

と奥さんが答えた。うわっ、そんな高度な技、僕にできるだろうか？

「皆で一緒に、移動できるようにしたいですね」

僕の心配を代弁するかのようには、青池さんが話してくれた。

「それなら、彼岸からの脱出シーケンスをゆーっくり実行しよう。それ位のプログラム変更なら、BB内から可能だ」

松本教授は早速、此岸で何やら作業を始めたようだ。彼岸から見ると、松本教授の手元にぼんやりと霧がかかったように見える。まるで原子中の電子の存在確率を示す雲のようだ。奥さんと青池さんは何やら相談をしているようだが、会話の内容は理解できなかった。

準備が完了したらしい。いつの間にか僕らは四畳半の部屋くらいの大きさの透明な球体の中にいた。前方に松本教授、右後方に奥さん、左後方に青池さん。この三人で作られる正三角形の中心に僕がいた。守られているように思う。球体は少しずつ速度を増して前進していく。それとも周囲の景色が逆方向に移動しているのだろうか。様々な景色が透明な球体の外を流れていく。これまで被験者として彼岸の多くの場所を探索してきたが、見覚えのある風景もあれば、初めて見る風景もあった。無機質な廃墟のような世界から、生き生きとした生命体で満ちあふれた世界まで、従来のように視聴覚だけに頼ることなく、それら世界のすべての構成物の存在感を直に感じ取ることができた。彼岸は未知のエネルギーの塊だ。

「そろそろ、見えて来るんじゃないかな？」

と松本教授が言う。下を見ると、どこまでも続く山林が目に入ってきた。彼岸から此岸を見ているのだろうか。深夜なので細部は良く分からないが、所々に人工の明かりらしきものが見える。

「この辺だと思うが……」

松本教授の説明によると、このほぼ真下にBBが設置されているとのことだ。上から見た限りでは、単なる雑木林のようにしか見えない。しかし、いきなりBBのある部屋まで行くのは、すぐ近くに犯人グループのBBが設置されていることもあり危険なので、とりあえず球体を上空に停止させたまま様子を探ることになった。こちらの行動がばれる前に、できるだけ情報を収集しておくのが得策だという判断だ。

「では、わたくし、この近辺を調べに行つてまいります」

そう言うとき青池さんは透明な球体から飛び出して、夜空を泳ぐように飛んで行つてしまった。まったく羨ましい。彼女はこの能力をどこで身につけたのだろうか？ 生まれつき？ それとも訓練で？

二〜三分後、青池さんが戻ってきた。

「最寄り駅は中央本線の小淵沢駅のようです」

山梨県か！ しかも小淵沢というと長野県との県境だ。以前、野辺山宇宙電波観測所に取材に訪れたことがあったが、八ヶ岳周辺は空気が澄んでいて電波ノイズが少ないという特徴がある。しかも小淵沢はここ数年、別荘の建設ラッシュで、山林に建機や建材が持ち込まれても怪しまれることはない。秘密研究所の建設場所としては、なるほど合理的だ。

「そこで何をしている！」

背後から男の怒鳴り声が響いた。男性が二人、僕らのすぐ後ろに浮かんでいる。彼らの不安な心情が直接、僕の胸にも届くので、少し息が苦しくなった。

「奴らだ」

松本教授は小声でそう言うと、ゆっくりと彼らの方に向き直った。僕らを囲む透明な球体は消滅したが、彼らの顔は良く見えないままだ。此岸での「顔を知られたくない」という彼らの強い思念が、彼岸でも「実体化」しているかのようだ。

「一台のBBに二人で入っていたのか……。それじゃ、効率が下がる。時間も掛かるわけだ」

と松本教授は指摘したが、二人いる男のうち大柄な方の男はその発言を無視して、

「あとの三人は何者だ？」

と尋ねた。松本教授は無言のまま微笑している。すると今度は、もう一方の小柄な方の男が、

「まだ論文に書かれていない重要な研究成果があるようですね。あとで、じっくりと話を聞かせてもらいます」

と言い、BB外にハンズフリー電話で何か指示を出した。別に武器で脅されているわけではないのだが、生々しい緊張感が僕らを貫く。残念だが、これまでか。せめて、ここから見える景色を胸に刻んでおこう。月明かりのみで不鮮明だが、場所を特定するための何らかの手掛かりにはなるだろう。あとは、いつでも此岸に戻るように心の準備をしておいた方が良さそうだ。

その時、天から声が聞こえてきた。

「松本くん」

見上げると、見覚えのある老人が降ってきた。まさか、梅田教授？

「あれ、学部長？」

思わず、松本教授も声を上げた。

梅田教授と思われるその老人は勢い余って、かなり低空まで下りてから、再び僕らと同じ高さにまで戻ろうと必死にもがいていた。

続いて、竹原准教授も天から降りてきて、僕らと同じ高さでピタリと静止した。

「やっと見つけた。随分、探しましたよ……」

竹原准教授は、ほかに三人の西洋人と二人の東洋人を従えている。

「梅田先生も、竹原先生も、アメリカにいるんじゃないかなかったですか？」

と僕が尋ねると、竹原准教授は、

「ニュースで事件のことを知って、アメリカにある変性意識の研究所から様子を窺いに来しました。大変なことに巻き込まれてしまいましたね」

と答えた。ようやく僕らと同じ高さに戻ってきた梅田教授は、

「『僕にも何か手伝えることはないかな』と竹原くんに相談したら、『松本先生の所へ一緒に行きましょう』ということになって……。世界には、B以外にも脳を変性意識状態にする装置が色々あるんだね」

と感心していた。松本教授は、三人の西洋人と二人の東洋人に会釈してから、竹原准教授に、

「彼らは？」

と尋ねた。竹原准教授は、

「まず、こちらのお三方は、今回の出張先のアメリカの研究所の研究員です。あとの二人は東南アジアの修行僧で、彼岸で知り合ったのですが、事情を話したらそのまま付いて来てしまいました」

と笑いながら答えた。

彼岸も随分と賑やかになったものだ。しかし、この展開の早さに対応できない人もいる。

「ひとつ確認したいことがある。この会話は事実か」

犯人グループのうち、大柄な方の男が尋ねた。表面上は威張った態度だが、彼の怯えている様子がダイレクトに僕の心に伝わってきた。

「あの方たちは？」

梅田教授が松本教授に訊く。

「ああ、今回の拉致事件の犯人ですよ」

これにはさすがの梅田教授も竹原准教授も絶句した。次にどう行動すれば良いかわからないようだ。もちろん僕にも分からないが……。

無言のまま、三十秒ほど経過した。竹原准教授は、何かに気付いたらしく、ある行動に出た。

「この会話が事実であることを証明するには、彼岸ではなく此岸で、情報の照らし合わせをする必要があります」

と述べ、犯人たちの反応を見ている。続いて梅田教授が、こう提案した。

「それなら、僕のチャット・システムを使うと良い。世界中どこからでもアクセスできるし、履歴も残らない。途中、ランダムに選ばれた幾つかの踏み台サーバを暗号化して通過するから、セキュリティも万全だ」

踏み台！ 学部長がそんなクラッカーまがいの悪事を働いていたとは……計り知れないな、実験物理学の教員は。

大柄な男と小柄な男が、此岸で何やら話をしていたようだが、どうやら結論が出たらしい。小柄な方の男が、

「わかりました。では、その提案されたチャット・システムを使って、まずは検証してみます」

と表明した。実際、彼らにも本当に分からなかったのものであろう。まず事実を確認し、その事実を元に判断や行動をするのは理系の研究者らしい科学的な態度である。

梅田教授が犯人たちにアクセス先を伝えた。竹原准教授は、

「では、ここまでの経緯を、チャットで話してきます。コンピュータは別室にあるので、一旦ここから抜けます」

と言って、彼岸から姿を消した。犯人たちの姿は彼岸に残ってはいしたが、本人がチャットしているのか、それともBB外の人間がチャットしているのかは不明だ。しかし、心ここにあらずなのか、時々彼岸からフツと消え

そうに見えることもあった。

数分後、竹原准教授が彼岸に戻ってきた。

「少なくとも八〇九割以上は合致していたのではないかと思います。かなり驚いていたみたいですね。いくら感情を表に出さないようにしても、質問内容から驚き具合を推測できます。彼らにとっては予想外の展開だったのでしょうか」

犯人たちの姿は相変わらず、消えそうになったり彼岸に戻ってきたりを繰り返していた。そのうちに、何の断りもなく、彼岸から完全に消えてしまった。しかも、あろうことか、松本教授までもが彼岸から消されてしまったのだ！

「あ、松本先生！」

「しまった、やられたか……」

B B 本体は犯人グループが掌握しているのです、最悪の場合、電源を抜かれれば全く動作しなくなる。松本教授のことが心配だが、人質でもあるので慎重な対応が必要だ。残された十人で打ち合わせをした結果、アメリカ

からやってきた五人は様子を見るためしばらくここに残るが、日本にいる青池さんと僕は明日、此岸で情報収集をすることになった。そのため、まず此岸へ戻り、休憩（睡眠）と準備をする。修行僧の二人は此岸の母国へ帰るそうだ（それが良いだろう。元々無関係なのだから……）。なお、松本教授の奥さんはもう亡くなっているので此岸に戻ることはできない。当面、アメリカからの五人と行動を共にするようだ。

此岸に帰還すると、まずミネラルウォーターや果物などで水分を摂取した。これは松本教授の奥さんからのアドバイスだ。少し気持ちが落ち着いたらとところで、部屋の中で携帯電話を探してみる。携帯電話はベッドの下に落ちていた。が、不思議なことに電源が切れている。電源ボタンを長押ししないと電源は切れないはずだが、そのような操作をした覚えはない。

一つ気になるのは、実は携帯電話の電磁波か音波が彼岸への移動を妨げていたのではないか、という疑念だ。青池さんが彼岸で松本教授を発見したとき、僕は彼岸へ移動できなかったが、携帯電話は僕の頭部に密着して

いた。そして、僕が「天使」に導かれて彼岸へ移動したとき、携帯電話はベッドの下にあった。恐らくもうその時点で電源はオフになっていたのだろう。今後も、彼岸の状況を此岸でリアルタイムに通信しつつ確認する作業は、ごく普通に行われるはずだ。この因果関係を早急に解明しておく必要がある。

取り急ぎ、青池さんへ電話して、一連の彼岸での出来事を確認（答え合わせ）した。予想通り、細部まで一致していたが、青池さん自身はかなり疲労している様子だった。無理もないと思う。

ちなみに青池さんは携帯電話を所有していないことが分かった。昔から有線の電話しか使っていないとのことだ。

翌朝、目覚まし時計のアラームが鳴る前に、携帯電話の着信音で目が覚めた。青池さんからだ。珍しく興奮した声である。

「今すぐテレビをつけて！ 松本先生が解放されました！」

僕は飛び起きて、テレビをつけた。朝七時のニュースだが、どの放送局

も「松本教授、無事保護される」という小さなテロップが画面の角に貼り付いている。中央自動車道の小淵沢インターチェンジ付近の農道をパンツ一丁で歩いていたところ、地元の農業の方に救出・保護されたとのことだ。今は病院へ運ばれて検査を受けているが、健康面での心配はないという。なお、本人の証言として「複数名に拉致されていた」とだけ報道されている。

「良かった。……本当に良かった」

それまでの覚悟が大きかっただけに、安堵のあまり自然に涙が出てきた。松本教授が犯人グループから解放された理由は不明だが、これで松本教授の捜索の必要は無くなった。これから関係者で連絡を取り合って、松本教授を迎えに行こうと思う。

第四部 考察

◎数日後（松本教授との対話）

松本教授が実験物理学の研究室に帰ってきた。警察による現場検証が一段落し、ようやく大学関係者の立ち入りと復旧作業開始の許可が下りたのだ。木造校舎の壁の修復工事についても、これから本格的に取り組むことになる。

松本教授は機材や書類が散乱したままの変わり果てた研究室の様子を見回して大きな溜め息をついた。それからBBの置かれていた跡地へ移動し、その上に立ったまま目を閉じてしばらく動かなかつた。研究室の校庭側の壁の端に僅かに残っていた窓ガラスから夕陽が部屋の中に細長く射し込んでいる。

「BB、取られちゃいましたね」

と僕がつぶやくと、

「なあに、B Bなんて、また作ればいいさ」

松本教授は目を開けて、無理に笑顔を作ってみせた。

「それにしても、奴らの狙いは何だったのでしょうか？」

「……さあね、私にも分からんよ」

と松本教授は吐き捨てるように言った。あの忌わしい事件以来、僕もずっと考えているのだが、犯人グループの真意が見えてこない。

「もし、『意識だけのタイムマシン』が完成したとしても、過去を見に行くだけじゃ、あまり利用価値が無いように思います」

「うむ。たしかに『歴史的事実の検証』とか言ってたな」

「もしこれが『未来を見に行く』と言うのなら、まだ分かるんですよ。数日後の株価や為替を調べて金儲けをしよう、という非常に俗っぽい目的のために利用するというのなら、分かり易いのですが……」

「そういう本音を隠して、歴史学者の集団のフリをしていた？ どうもそういう感じではないんだよなあ」

「では、歴史的事実が明らかになると困る連中でしょうか？ 今は何とか

世の中を誤魔化せていても、いずれB Bや『意識だけのタイムマシン』が一般化して、万人に知られてしまうことが判明したら、先手を打っておく必要がありますから」

「なるほど……だが、先手を打つ必要性を調べるためだけに、こんな大掛かりな事件を起こしたとは信じ難いがね。ただ、情報を共有されることを恐れていた、とは言えるかもしれない」

「情報を共有されることを恐れる？」

「彼岸に十人もの人々が集まった時、あの一部始終を第三者に見られていたことが証明された。それをきっかけに奴らの作戦に大幅な修正が求められ、結果的に私の解放につながった、と私は睨にらんでいる。もともと奴らは証拠を一切残さずに消えてしまったわけだが……」

「あの時、アメリカから五人もやって来るとは僕も驚きました。国連の選挙監視団のようなものですかね」

「そういう意味では、例の東南アジアの修行僧の存在価値は大きかったかもしれない。まるつきり無関係な人間から観察されていると、さすがに好

き勝手はできなくなるだろう。衆人環視のもとで悪事を働けないのは、此岸も彼岸も同じということさ」

ここで松本教授はニヤリと笑い、僕も心の底から笑いが込み上げてきた。終始無言だった謎の修行僧たちに感謝しなければなるまい。

もしかしたら「情報を隠すことで特権を維持する時代」は終わろうとしているのかもしれない。今回の事件の真の目的云々についてはともかく、これはこれで愉快な考え方だと思う。すべての情報が共有される社会。もちろん、ある種の息苦しさはあるかもしれないが、それ以上のメリットが出てくる可能性も否定できないのではないか。遠い未来の人間社会のあり方を提示するオルタナティブな（もう一方の）極。現実には既得権益を握っている連中が全力で妨害してくるだろうから成立は困難だろうが、思考実験としては面白い。

「Bを盗んだ犯人グループとも、いずれまた彼岸で会えるだろう。どうしたって彼岸という共有世界からは逃げられないよ」

松本教授は、そう言って笑った。

◎数ヶ月後（竹原准教授との対話）

ある日、竹原研のゼミが終わってから、竹原准教授に例の事件とその後の科学社会学的な分析についてインタビューしてみた。

「マスコミは、一旦報道したことは滅多に修正しないし、絶対に謝罪しません」

のっけから竹原准教授は強い調子で、マスコミ批判を始めた。

「実際、興味本位で報道していたテレビ局も、事実関係が明らかになるにつれて多少はおとなしくなってきましたが、相変わらず実験物理大学や松本先生への批判を止めていません」

竹原准教授の言葉からは、抑えきれない怒りが感じられる。

「しかも、有名大学の教授らによる『対立する学説』を幾つか、松本先生の学説にぶつけて来ましたね。もちろん、私たちの説をより強固なものにするためには良心的批判者は絶対に必要で、それならば私たちも歓迎するのです。ちゃんと中味があれば、痛烈な批判ほど嬉しい。実際、今後の研

究の参考になる論文も届けられています。でも、中には酷いのもあって、自分たちでBBに相当する実験装置を《試作》したらしいのですが『実験に再現性がないから松本論文は捏造だ』なんていうのまで出てきた。さすがに私たちの方がノウハウがあるので、実験装置の改善のお役に立てるのではないかと思い、『その実験装置を見せて欲しい』とお願いしたのですが、断られてしまいました。なんかフェアではないのです。本当に真理を追究したいと思っているのかな？ それとも批判自体が目的なのかな？ もし今こちらにBBがあれば、逆に彼らを招待して実体験してもらおう方法もあるのですが、まだ三代目のBBは完成していません。でも、マスコミは『捏造』という言葉だけに過剰に反応して、すっかり松本先生はトンデモ学者扱いです」

「たしかに、この数ヶ月間で、松本先生の研究を否定する記事が量産されているようです。新聞、雑誌、ネットなどでも根強くネガティブ・キャンペーンが続けられています」

「まあこれも、ある部分は、予想されたことではあるんです。公害や薬害

といった分野を例に挙げましょうか。まず市民の側に立った学者が企業なり国なりの問題点を指摘するとします。すると程なく体制側の学者がそれに反論して《時間稼ぎ》のフェーズに入る。体制側は手を変え品を変え、様々な反論を試みてきますよ。結局、真相については、そのまま『藪の中』になることもあれば、その間に被害が拡大して、もうどうにも隠しきれなくなつて初めて市民側の学者の学説が正しかったことが被害者の多さと共に《証明》されることもある。もちろん市民側の学者の言っていることが常に正しいとは限らないし、そもそも市民側か体制側かという立場の違いは科学的立場とは本来無関係なものです。ここで問題となるのは、《時間稼ぎ》の間は、市民側学者・体制側学者のどちらが正しいのか、一般人はおろか他分野の多くの科学者にも評価できないことです」

「まさに現在も、うやむやなまま社会が突き進んでしまっているけれど、実は深刻な問題を抱えた科学論争も多いのではないでしようか？」

「おっしゃる通りです。ただ、公害や薬害であれば《時間稼ぎ》をすることで誰の利益になるのかは明白なのですが、BBや彼岸については誰の利

益になるのが非常に分かりにくい。ネット上では、右派からも左派からも叩かれていることは知っていますが、哲学論争の域を出ず、どうも実利に結びついていくような思えません」

「科学論争を曖昧にするための手法は同じだが、目的が見えない、と」

「そうです。……まあ、でも、最終的には《事実こそが勝つ》と信じてますけれど……。ああ、《信じる》のは科学じゃないか。いや、《信じる》ことこそが科学の本質だ！」

と言つて、竹原准教授は微笑んだ。

最後に、僕はずっと気になっていた疑問を竹原准教授に話してみた。

「例の事件で、犯人グループが一方的に松本先生を解放したのではなく、あの時、僕らが彼岸で得た情報を元に小淵沢を搜索して、独力で松本先生を救出していれば良かったのでしょうか？」

これには竹原准教授は即答で以下のように指摘した。

「いや、もしそんなことをしたら、なおのこと《自作自演》の疑いを掛けられて、大変なことになったと思います」

やはりそうか。松本教授が小淵沢に在ることを何故知っているのか？という疑問については、まだ彼岸の存在が浸透していない現代においては『自作自演』が最も合理的な解釈となるのだ。本当のことを知っていても、そのまま実行できないもどかしさ。多かれ少なかれ最先端を歩む者に共通した悩みなのかもしれない。

彼岸が此岸の出来事を変えるための重要な舞台となり、結果的に今回は松本教授の解放につながった。つまり、『BBが現実世界を動かし、利益をもたらした初のケース』とも言えるわけだ。新しい唯物論（拡張した唯物論）において歴史的な一ページを刻むはずだったのに、どうやら今回はその機会を逸してしまったようだ。

◎十数年後（青池素子との対話）

「こんな所で、お会いできるなんて……。本当に青池さんですか？」

「こんな所だからこそ、お会いできるのです。ごぶさたしております」

「あれから、どうされていたのですか？　突然、行方不明になられて、心配しました」

「ごめんなさい。BBの量産が軌道に乗ったようなので、次の仕事へ移りました」

「今は、どんな仕事をされているのですか？」

「ジグソーパズルのピースをはめていくような仕事です。因果関係の流れを調整します」

「……此岸の仕事ではなく、彼岸の仕事のようですね」

「はい。過去や未来といった時間の順番には、あまり意味の無いことが分かりました」

「相変わらず《先》へ進まれているようですね。僕には想像もつかないで

す」

「森さんは？」

「お笑い系サイエンスライターで、まだ食べています。ありがたいことです」

「あれから日本は変わりましたか？」

「ようやく半数の科学者が彼岸の存在を受け容れるようになりました」

「そうですか。でも社会全体に浸透するには、まだまだ時間が掛かりそうですね」

「それに関連して、最近、日本では《死刑廃止》について熱心に議論されています」

「国家が合法的に人の命を奪うことの是非が問われているわけではないのでしょうか？」

「凶悪犯を死刑にしても彼岸へ帰るだけならば、終身刑にして懲役を課すべきだと……」

「なるほど。それなら『被害者感情』としても自然に受け容れられそうで

すね」

「でも良く考えてみると、彼岸の实在が証明されなくても同じ結論が出そうなものです」

「そうですね。以前は、《死後の世界》の有無すら分からなかったわけですから」

「その《有無》は、本当は《分からない》はずなのに、一方的に《無》と決めてしまった」

「《有》の可能性が否定できないなら、罰としては終身刑の方が百パーセント確実なのに」

「まさに《パラダイム》ですね。そのような思考の枠組みに社会全体が囚われていた」

「でも、『彼岸へ帰ることが最大の罰』とする考え方にも、一理あると思いますよ」

「ああ、そこまでは考えませんでした。法も政治も経済も、価値観の見直しが必要ですね」

「近現代の国家であつても、宗教を含め、文化的伝統の影響を強く受けていますから」

「少なくとも、『金銭を要求する宗教』のインチキ性は科学的に明らかになつてきました」

「宗教は、これから本来の形に戻っていくのかもしれませんが、呪術も、占いも」

「結局、まともな宗教が直感的に説いてきたことを、科学が実証的に解明してきたのですよね」

「その因果も『あらかじめ彼岸で計画されていたこと』と言ったら驚きますか？」

「そりゃ驚きますが、僕は自分の意識で確認しない限り、信じませんよ。……あはは」

「その好奇心が、世界を、宇宙を、ここまで発展させてきたのです。……うふふ」

(了)

【参考文献】

- 『唯物論と弁証法』（足立正恒著、新日本新書）
- 『はじまりのレーニン』（中沢新一著、岩波書店）
- 『認識とパターン』（渡辺慧著、岩波新書）
- 『THE ANSWER』（G.P.S.著、新風舎）
- 『神秘学入門』（富増章成著、洋泉社）
- 『死後探索（I～IV）』（ブルース・モーエン著、ハート出版）
- 『死後体験（I～IV）』（坂本政道著、ハート出版）
- 『臨死体験（上・下）』（立花隆著、文春文庫）
- 『脳を究める』（立花隆著、朝日新聞社）
- 『脳内現象』（茂木健一郎著、NHKブックス）
- 『DISCOVER (AUGUST 2007)』（Discover Magazine）の記事「10 Unsolved Mysteries of the Brain」
- 『日経サイエンス（2007年1月号）』（日経サイエンス社）の記事「人類は桃源郷を創造できるか」

かがくかくめい しゅんかん
科学革命の瞬間

2009年2月9日 発行 (Version 1.1)

著者 佐藤皇太郎

本作品は下記のウェブサイトから無料でダウンロードできますが、著作権は著者に帰属します。

<http://www.docca.net/tadabun/>

© Kotaro Sato 2009